

秋田城跡歴史資料館年報 2020

秋 田 城 跡



秋田市教育委員会

秋田城跡歴史資料館年報 2020

秋 田 城 跡

秋 田 市 教 育 委 員 会

序 文

令和2年度の秋田城跡発掘調査は、焼山地区北西部において2箇所を実施し、奈良時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が検出されるなど、多くの成果をあげることができました。

第114次調査では、外郭西門よりのびる城外西大路の道路遺構が発見され、位置関係や延長方向を確認することができました。また中世から近世にかけて墓域等として宗教的に利用されていたことを確認し、中世以降における周辺利用状況の把握のために重要な知見を得ることができたといえます。

第115次調査では外郭西門付近を調査し、材木堆跡や堅穴建物跡が確認され、当該地区における外郭区画施設の位置や変遷、利用状況について把握することができました。

これらは、史跡の保護・整備・活用を行う上でも重要な情報であり、今回の成果を復元整備や公開活用に活かしていく予定です。

また、環境整備事業につきましては、城内東大路の整備や史跡公園連絡橋の工事を行い、順調に整備事業を推進しております。

このように、秋田城跡の発掘調査と保護管理、環境整備事業が順調に進んでおりますことは、文化庁および秋田県教育委員会をはじめとする関係機関や環境整備指導委員会のご指導と、地元住民の皆様のご理解・ご協力の賜物と、心より深く感謝申し上げます。

令和3年3月

秋田市教育委員会

秋田城跡歴史資料館年報 2020

目 次

例言・凡例

I 調査の計画と実施状況	1
II 第 114 次調査報告	
1 調査経過	2
2 検出遺構と出土遺物	7
①第Ⅲ層面検出の遺構と遺物	7
②第Ⅳ層面検出の遺構と遺物	13
③第VII層面検出の遺構	14
3 基本層序および各層出土遺物	17
III 第 115 次調査報告	
1 調査経過	23
2 検出遺構と出土遺物	25
①第Ⅲ・Ⅳ層面検出の遺構と遺物	25
②第V層面検出の遺構と遺物	28
③第VII層面検出の遺構と遺物	30
3 基本層序および各層出土遺物	36
IV 考察	45
V 秋田城跡環境整備事業	52
VI 秋田城跡保存活用整備事業	54
VII 秋田城跡現状変更	56
写真図版	57
報告書抄録	73
秋田城跡歴史資料館要項	74

例　　言

- 1 本書は、令和2年度に実施した秋田城跡第114・115次発掘調査、秋田城跡環境整備事業、秋田城跡保存活用整備事業、秋田城跡現状変更の記録を収録したものである。
- 2 本書の編集は伊藤武士、佐藤桃子、児玉駿介が行った。
- 3 遺物の実測・トレース、遺構図の作成およびトレースは、伊藤・佐藤のほか、整理員の森泉裕美子、伊藤雅子、宮田美奈子が行った。
- 4 遺構・遺物の写真撮影は、佐藤が行った。
- 5 墓書の解説については、三上喜孝氏（国立歴史民族博物館）の指導を得た。
- 6 本調査で得られた資料は、秋田市で保管している。
- 7 発掘調査では、以下の方々や関係機関から指導・助言を賜った。記して感謝したい。
渡邊定夫、田中哲雄、木村勉、熊田亮介、林部均、高橋栄一、三上喜孝、五島昌也、根岸洋、近江俊秀、芝康次朗、小松正夫、大橋泰夫、高橋学、武藤祐浩、加賀朋夏、伊豆俊祐、文化庁文化財第二課、国立歴史民俗博物館、奈良文化財研究所、宮城県教育委員会、東北歴史博物館、多賀城跡調査研究会、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター
(敬称略・順不同)

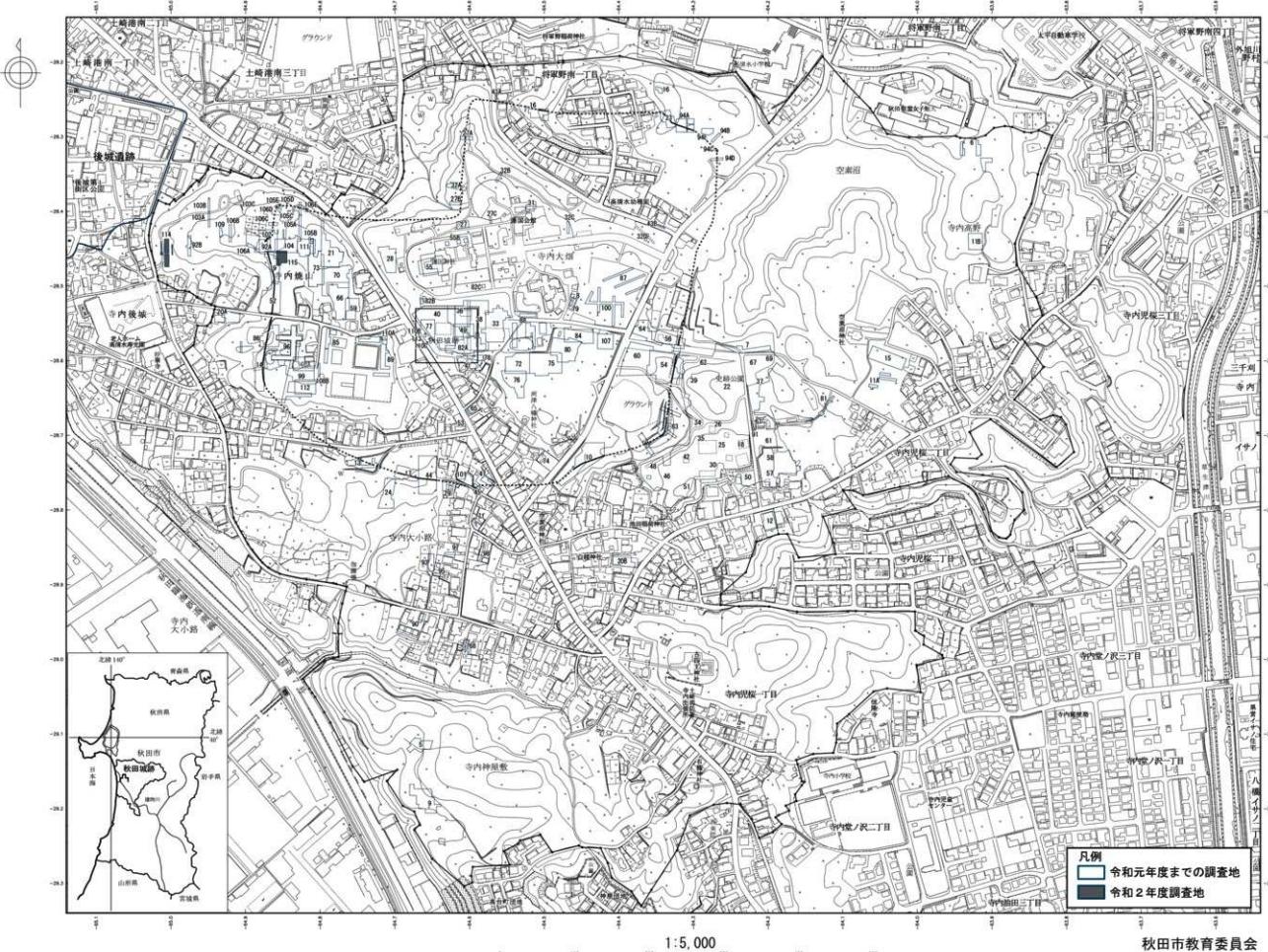
凡　　例

遺　物

- 1 土器の断面を黒く塗りつぶしたのが須恵器である。
- 2 土器の性格、表面付着物の相違については、下記のスクリーントーンで表現した。
 黒色処理 転用硯 煤 漆
- 3 土器の調整技術や切り離し等の表記は、下記のとおりである。
 - ・回転利用ケズリは、ケズリ調整と記載。ケズリ調整以外の調整はその都度別記。
 - ・ロクロ等広い意味の回転を利用したカキ目調整は、ロクロ利用のカキ目調整と記載。
 - ・切り離し、粘土紐、タタキ痕跡等、成形時痕跡の消滅を目的としない軽度な器面調整痕跡は、軽いナデ調整と記載。成形時痕跡の摩滅を目的とし、痕跡が一部残るものをナデ調整、ほとんど痕跡を残さないものを丁寧なナデ調整と記載。
 - ・底部回転ヘラ切りによる切り離しは、ヘラ切りと記載。底部回転糸切りによる切り離しは、糸切りと記載。底部回転以外の切り離しはその都度別記。
 - ・遺物実測図の縮尺は、瓦は $1/4$ 、石器 $1/2$ 、その他の遺物は $1/3$ とし、それぞれ各図面に縮尺を示した。写真の縮尺は瓦約 $1/4$ 、石器約 $1/2$ 、その他の遺物は約 $2/5$ とした。

方位・測量原点

文章中および図面の方位と方向を示す東西南北は、遺跡全域に設定された発掘基準線に基づく真東、真西、真南、真北を示す。遺跡の測量原点は、外郭範囲内のほぼ中央にあたる政厅正殿東の任意点に埋標されている。その原点から真北を求める南北基準線を定め、これに直交する東西基準線を定めて、座標軸を設定している。報告においてE・W・S・Nと共に示された数値は、測量原点からの座標上の位置、東西南北の距離を示す。測量原点は世界測地系座標で、X=-28,562,592, Y=-64,607,889である。



第1図 秋田城跡発掘調査位置図

I 調査の計画と実施状況

令和2年度の秋田城跡発掘調査は、第114・115次調査を実施した（第1図）。

発掘調査事業費は、総事業費（本体額）9,374,000円のうち国庫補助額4,687,000円（50%）、県費補助額937,000円（10%）、市費3,750,000円（40%）である。調査計画は、下記表1のように立案した。

表1 発掘調査計画

調査次数	調査地区	発掘調査面積m ² （坪）	調査予定期間
114次	焼山地区北西部	300 m ² (90.75)	4月27日～7月31日
115次	焼山地区北西部	300 m ² (90.75)	8月1日～9月30日
計		600 m ² (181.5)	

発掘調査に伴う現状変更許可申請について、第114・115次調査は令和2年1月29日付け平31城歴第455号で申請し、令和2年3月19日付け元文庁第4号の1761で許可された。

令和2年度の発掘調査は、焼山地区的正報告書作成および環境整備計画を踏まえて、周辺の実態把握のために焼山地区北西部の2箇所を調査対象として実施した。

第114次調査地は焼山地区北西部、西側に伸びる尾根上地形の下方にあたり、周辺調査では外郭西門跡や門、城内外西大路の存在が確認されている。また、中世の墓域や土壙と門などの遺構が存在したことが確認されている。城外西大路の位置と実態の把握、ならびに当該地域の利用状況を確認することを目的に実施した。

調査の結果、中世から近世にかけては火葬墓や仏教関係遺構を確認し、墓域として利用されている状況を把握することができた。古代については、奈良時代から平安時代にかけての城外西大路に関係する道路遺構、もしくは道筋に伴い造成されたと考えられる整地層を確認し、外郭西門から尾根を下り西側の後城遺跡方向へ向かう道路の位置関係を確認した。

第115次調査地は焼山地区北西部にあたり、周辺調査では、外郭西門へ延びる築地塀および材木塀が検出されており、この外郭西門区画施設と別れ、北東に延びる布振り状溝の存在が確認されている。また、北側に隣接する第104次調査地でも南北方向の材木塀が検出されたことから、これらが一連の区画施設であるか確認し、年代や変遷を明らかにすることを目的とした。また、この地域の利用状況を確認することも目的に調査を実施した。

調査の結果、過年度調査地にて検出されていた区画施設と連なる位置関係にある材木塀跡を確認し、外郭西門の城内側に併行する区画施設の位置等を把握することができた。他に周辺が、8世紀中頃から後にかけて居住域として利用されている状況を確認した。

令和2年7月23日に第114次調査の現地説明会を開催し、84名の参加があった。令和2年7月21日に文化庁文化財第二課 芝文化財調査官の調査指導を受けた。令和3年1月19日に宮城県多賀城跡調査研究所 高橋所長の調査指導を受けた。

令和2年度の発掘調査実施状況は下記表2のとおりである。

表2 発掘調査実施状況

調査次数	調査地区	発掘調査面積m ² （坪）	調査実施期間
114次	焼山地区北西部	257 m ² (77.75)	4月27日～8月21日
115次	焼山地区北西部	242 m ² (73.2)	8月17日～10月28日
計		499 m ² (150.95)	

II 第 114 次調査報告

1 調査経過

第 114 次調査は、焼山地区北西部を対象に、令和 2 年 4 月 27 日から 8 月 21 日まで調査を実施した。調査面積は 257 m² である。

第 114 次調査地は、外郭西門から西側へ約 120m 尾根上地形を下った地点である（第 1・2 図）。

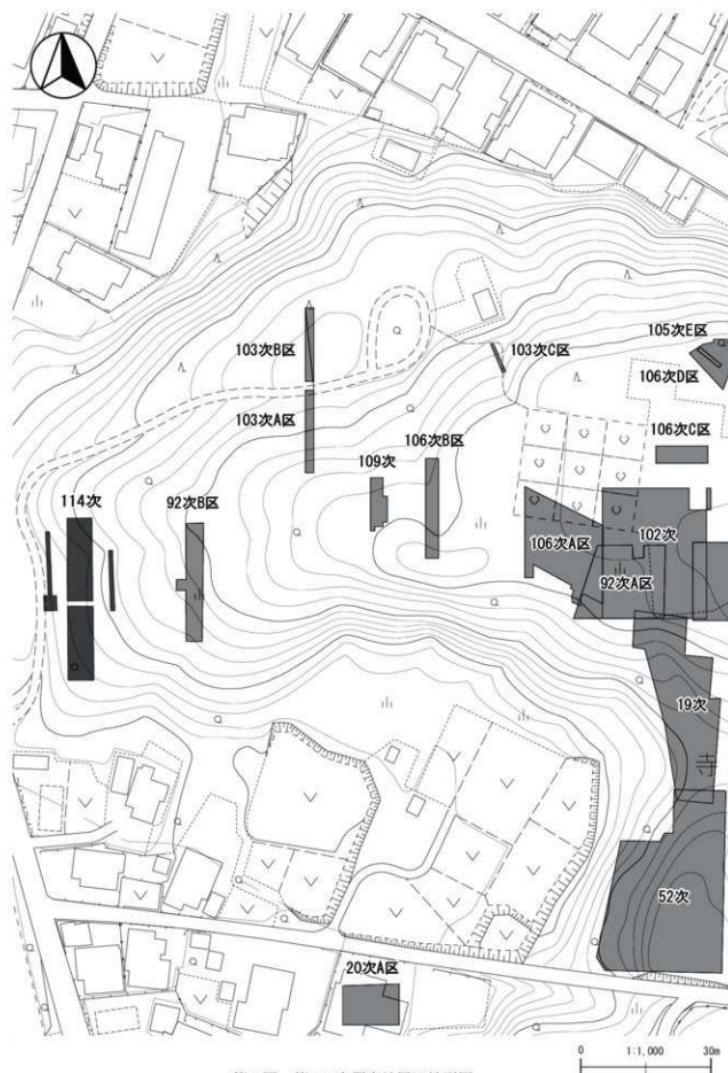
焼山地区北西部においては、これまでの調査で、外郭西門跡や門に取り付く外郭西辺・北辺の城壁が検出されている。また西門から城外・城内に延びる道路整地と道路側溝を検出しており、城外西大路・城内西大路の存在が確認されている。他に今回の調査地の東側では、第 92 次調査 B 区（平成 20 年度）、第 106 次調査（平成 27 年度）、第 109 次調査（平成 29 年度）において、中世の土塁や門、材木棚などが確認されており、16 世紀後半を中心とした施設として利用されたと考えられる。さらに、調査地の西側隣接地には 8 世紀から 9 世紀と 14 世紀後半から 16 世紀中葉を中心とする後城遺跡があり、古代の他に中世の生活城が存在したことが確認されている。

今回調査を行った第 114 次調査地の旧地形は、東から西へ下る傾斜面だったと考えられるが、中世や近世から現代にかけての造成によって大きく削平を受け、現在は段状の地形となっている。調査区については、斜面に直行して南北方向に東西 6 m × 南北 38.5 m に設定した。また、今回の調査地全体で確認された中世遺構を保護しつつ、古代の遺構の遺存状況を確認し、道路遺構の位置や延伸方向を把握するため、東側と西側それぞれにトレーンチを設けた。

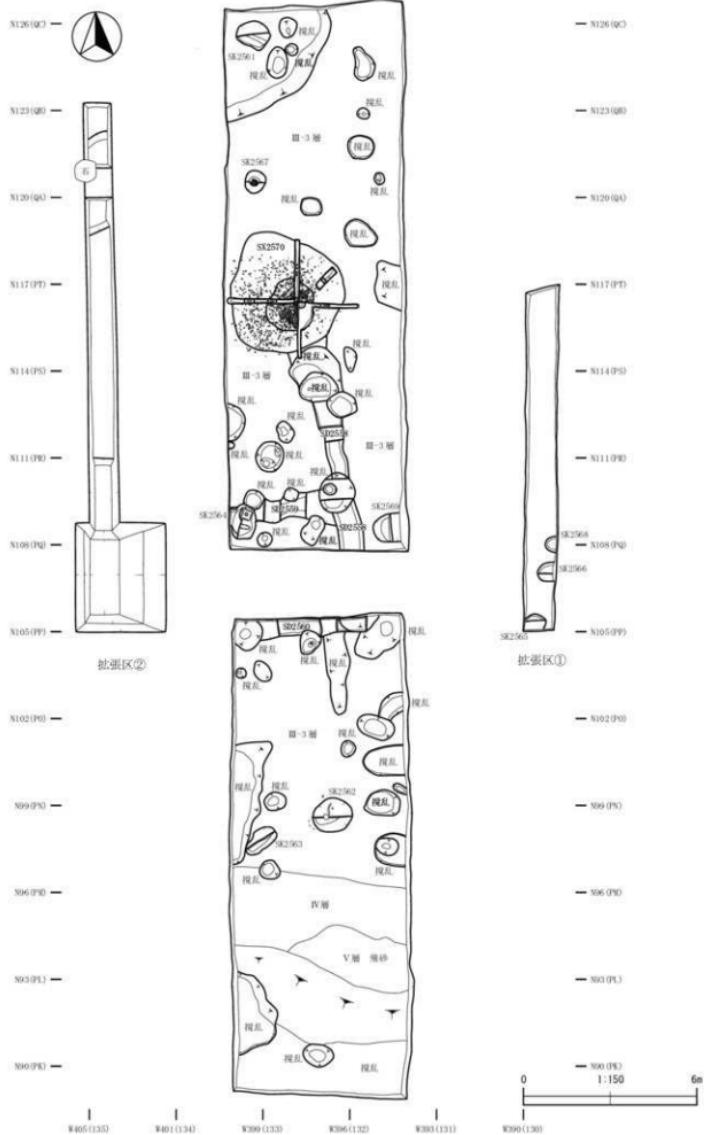
調査方法は、面的掘り下げを行い遺構の検出確認を行った後、時期等遺構内容の把握が必要な検出遺構について、保存に留意しながら半裁またはベルト等を残す形で遺構調査を行った。また下層遺構を追究する必要がある部分については、記録化後、部分的に掘り下げを行った。

調査は、まず調査地の樹木伐採などの整備を行った後、基準杭測量、調査区の設定を行った。調査区設定後、重機による表土・造成土の除去を行った（4 月 27 日～5 月 12 日）。その後、人手による造成土の除去を行った（5 月 13 日～5 月 22 日）。造成土の除去とともに検出されていた搅乱穴を掘り下げ、中世以降に整地されたと考えられる第 III-1 層と第 III-3 層面を検出し、調査区全体の精査・遺構検出を行った。第 III-1 層は調査地中央部の斜面にのみ部分的に堆積しており、遺構が検出されたのは第 III-3 層面からであった。この時点で、第 III-3 層面から検出された遺構は SD2558、SD2559、SD2560、SK2561、SK2562、SK2563、SK2564、SK2567、SX2570 であり、各遺構の掘り下げを行ったところ、ほとんどの土坑内から骨片と炭化物が検出され、火葬墓と考えられた。また、SX2570 は集石遺構と考えられたが、下部に埋納物は確認されなかつた。これを掘り下げ後、記録化を行った（5 月 25 日～5 月 26 日、第 3 図）。また平行して、東に拡張区①と西に拡張区②のトレーンチを設定し、手掘りによって表土・造成土の除去を行った。拡張区①では造成土除去後、第 III-1 層、第 III-2 層、第 III-3 層を検出した。第 III-3 層面から SK2565、SK2566、SK2568 を検出し、掘り下げと記録化を行った。拡張区②においては現代の削平の影響が大きく、中世以前の遺構面がほとんど遺存していない状況を確認した（6 月 9 日～6 月 22 日、第 4 図）。

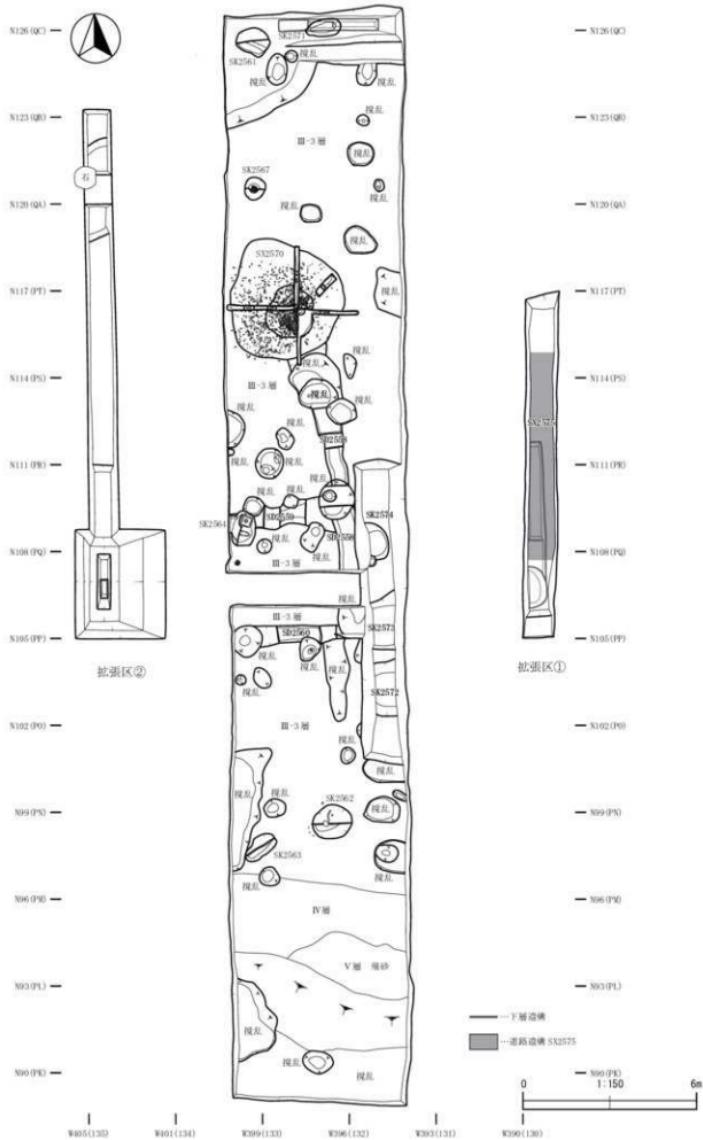
第 III 層以下の状況を確認するため、拡張区①、拡張区②および調査区の中央と北側にサブトレーンチを入れ、土層の堆積状況を把握した。その後、各々の地点で第 III 層以下の除去を行った。中央においては第 III-1 層の除去を行ったところ、第 III-3 層面から SK2569 を検出したため、掘り下げと記録化を行った後に第 III-3 層を除去した。第 III 層を除去した後、中世に整地されたと考えられる第 IV 層を検出した。第 IV 層面からは火葬墓と考えられる SK2571、SK2572 を検出し、掘り下げ・記録化を行った。この時点で中世以降に大きく 2 时期以



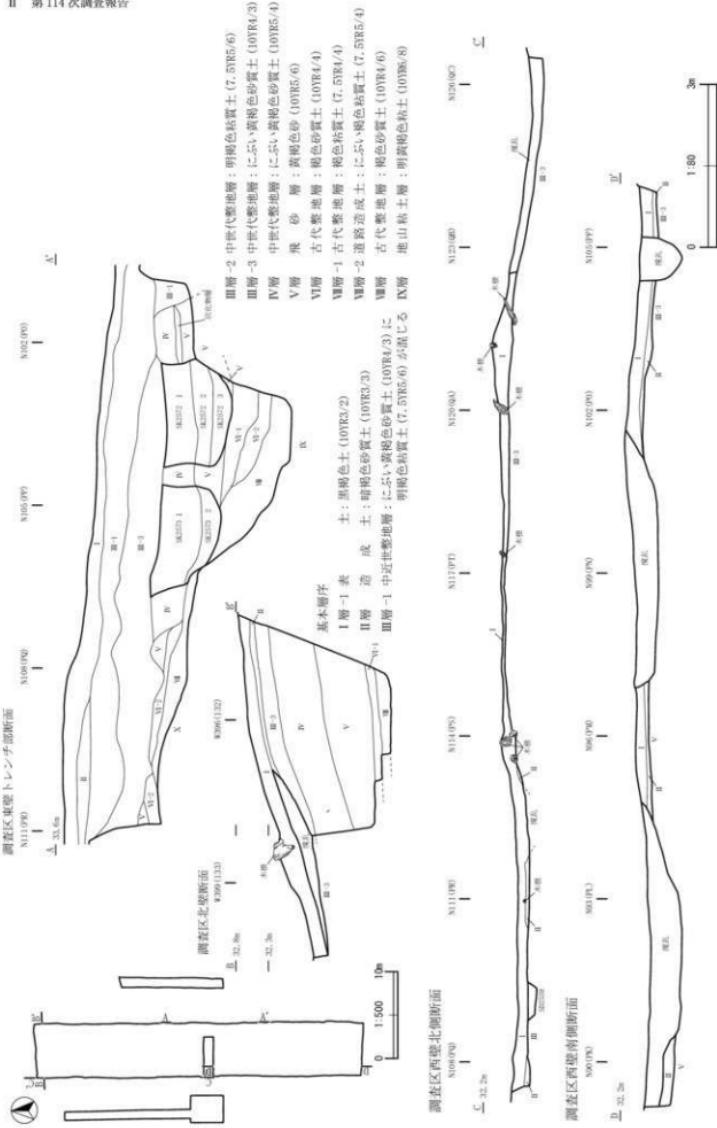
第2図 第114次調査地周辺地形図



第3図 第114次調査地上層面構造全体図



第4図 第114次調査地下層面構全体図



第5図 第114次調査地土層断面図

上の整地と利用があり、ともに墓域としての利用があった状況を把握した。その後、火葬墓の掘り下げ・追及を行い、第IV層面の下層には、中世以降に堆積したと考えられる自然堆積による飛砂層を検出した。これを除去したところ、いずれの地点からも古代の整地層である第VI層を検出した。特に拡張区①地点では道路硬化面であると考えられる平らに整地され硬化した第VII層が良好に遺存しており、一部を掘り下げ、整地状況を確認した（6月29日～7月20日）。

令和2年7月21日に文化庁文化財第二課芝文化財調査官の調査指導を受けた。令和2年7月23日には第114次調査の現地説明会を開催し、84名の参加があった。

道路遺構の遺存状況確認を目的に中央のトレーナーを拡大し、第III層、第IV層、第V層の除去を行った。その過程で、第IV層面からSK2573、SK2574を検出し、掘り下げと記録化を行った。調査区中央においてはこれらの遺構の掘り込みが地山粘土層まで達しており、道路整地と考えられる層は一部のみしか確認することができなかった。また、北側のトレーナーの一部を更に掘り下げ、土層の堆積状況を確認した（7月28日～8月4日）。

その後最終状況の全景写真の撮影後、遺物の取り上げ等を行い、調査区壁ならびに土層の記録化を行った（8月4日～8月7日）。全調査区の記録化の後、機材撤収およびバックホーと人手による埋め戻しを行い調査が終了した（8月17日～8月21日）。

2 検出遺構と出土遺物

今次調査では、主な遺構として、溝跡3条、土坑13基、集石遺構1基、道路遺構1面が確認された。各遺構は第III～VII層面で検出されており、第III層・第IV層は中世以降、第V層以下は古代に造成された整地層であると考えられる。以下、遺構が検出された各層ごとに遺構・遺物の記述を行う。

①第III層面検出の遺構と遺物

S D2558 溝跡（第6図、図版3）

調査区中央の第III-3層面で検出された南北方向の溝跡。長さ6m以上、幅72cm～80cm、深さ8cm。北で西に12°振れる。SK2570と重複し、これより古い。SD2559、SD2560と重複し、これより新しい。

S D2558 溝跡出土遺物（第7図1～2、図版9）

陶器（第7図1）：株洲系中世陶器の壺頭部～体部破片である。外面に平行叩き痕、内面に無文の当て具痕がある。

銭貨（第7図2・3）：2、3とも埋土出土の銭貨である。2は元豊通寶（北宋、初鑄1078年）、3は寛永通寶（古寛永、初鑄1636年）である。2は錢文不鮮明で、模鋳銭であると考えられる。

S D2559 溝跡（第6図、図版3）

調査区中央の第III-3層面で検出された東西方向の溝跡。長さ4.4m以上、幅80cm、深さ8cm。北で東に14°振れる。SD2558と重複し、これより古い。SK2564と重複し、これより新しい。

S D2560 溝跡（第6図、図版3）

調査区中央の第III-3層面で検出された東西方向の溝跡。長さ4.6m以上、幅48cm～56cm、深さ14cm～34

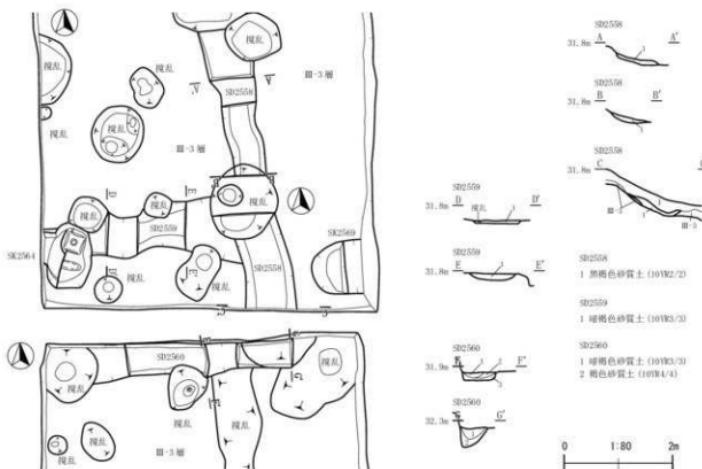
cm。SD2558と重複し、これより古い。

S D2560 溝跡出土遺物 (第7図4、図版9)

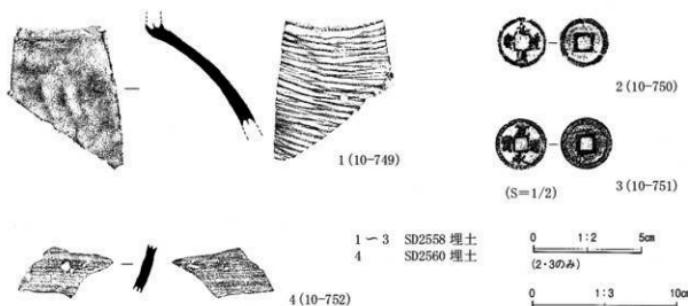
陶器 (第7図4) : 埋土出土の株洲系中世陶器の壺体部破片である。

S K2561 土坑 (第8図、図版3)

調査区北の第III-3層面で検出された。長軸1.2m、短軸80cm、深さ36cm。楕円形を呈する。埋土の一部



第6図 SD2558～SD2560溝跡



第7図 SD2558・SD2560溝跡出土遺物

に火葬骨片と若干の炭化物を含む。

S K2561 土坑出土遺物（第9図1、図版9）

銭貨（第9図1）：埋土出土の銭貨である。大義通寶（明、初鑄1368年）である。銭文不鮮明で厚さも薄く、模鉄銭であると考えられる。SK2561 土坑の火葬骨片に混じり出土しており、被熱により変色・変形している。

S K2562 土坑（第8図、図版4）

調査区南の第III-3層面で検出された。長軸1.4m、短軸1.2m、深さ54cm。円形を呈する。埋土に炭化物と微量に骨粉を含む。

S K2562 土坑出土遺物（第9図2、図版9）

陶器（第9図2）：埋土上層から出土した。瓷器系中世陶器の壺口縁部から頸部破片である。外面に緑色の自然釉がかかる。

S K2563 土坑（第8図、図版4）

調査区南の第III-3層面で検出された。長軸1.2m、短軸60cm、深さ36cm。梢円形を呈する。大量の炭化物を含む。

S K2564 土坑（第8図、図版4）

調査区中央の第III-3層面で検出された。長軸1.2m、短軸80m、深さ36cm。梢円形を呈する。埋土上層から大量の火葬骨片が出土している。骨片を取り除いた下層からは、五輪塔の火輪など、大型の石製品が2点埋納されていた。SD2559と重複し、これより古い。

S K2564 土坑出土遺物（第9図3・4、第10図1・2、図版9）

石製品（第10図1・2）：1、2ともに埋土下部から出土の石製品である。1は砂岩製であり、五輪塔の火輪部であると考えられる。2は花崗岩製の棒状石製品であり、被熱している。

銭貨（第9図3・4）：3、4ともに埋土上層出土の銭貨であり、いわゆる洪武通寶（明、初鑄1368年）であり、銭文不鮮明で厚さも薄く模鉄銭と考えられる。4は火葬骨片に混じり出土しており、被熱により変色・変形している。

S K2565 土坑（第8図、図版4）

拡張区①の第III-3層面で検出された。長軸72cm、短軸54cm、深さ24cm。梢円形を呈する。埋土から火葬骨片が出土している。

S K2565 土坑出土遺物（第9図5、図版9）

鉄製品（第9図5）：埋土出土の釘である。下端部が欠損している。

S K2566 土坑 (第8図、図版4)

拡張区①の第III-3層面で検出された。長軸54cm以上、短軸60cm、深さ27cm。楕円形を呈する。埋土から火葬骨片が出土している。

S K2566 土坑出土遺物 (第9図6、図版9)

陶器 (第9図6) : 埋土から出土した株洲系中世陶器の壺体部破片である。外面に平行叩き目、内面に無文の当て具痕がある。

S K2567 土坑 (第8図、図版4)

調査区北の第III-3層面で検出された。直径70cm、深さ20cm。円形を呈する。埋土から大量の火葬骨片がまとまって出土している。

S K2568 土坑 (第8図、図版4)

拡張区①の第III-3層面で検出された。長軸54cm以上、短軸60cm、深さ27cm。楕円形を呈する。埋土から火葬骨片が出土している。

S K2569 土坑 (第8図、図版4)

調査区中央の第III-3層面で検出された。長軸1m以上、短軸90cm、深さ18cm。楕円形を呈する。埋土から火葬骨片が出土している。

S K2569 土坑出土遺物 (第9図7~9、図版9)

銭貨 (第9図7~9) : 7~9は埋土出土の銭貨である。7、8は永楽通寶(明、初鑄1408年)、9は洪武通寶(明、初鑄1368年)である。いずれも火葬骨片や炭化物に混じり出土している。

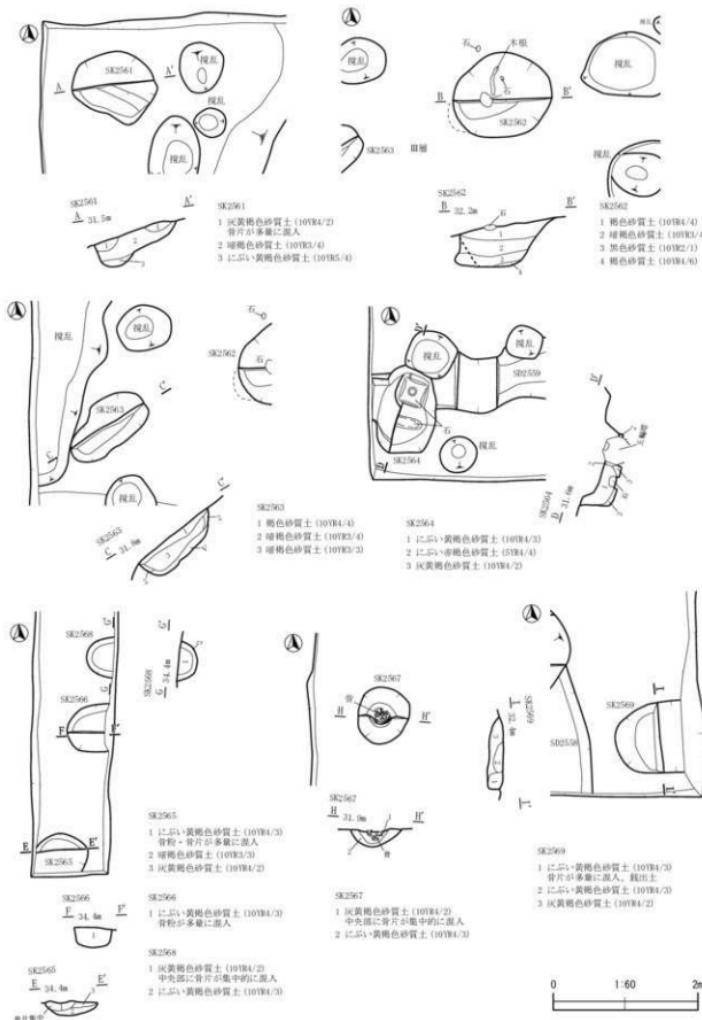
S X2570 集石遺構 (第11図、図版5)

調査区中央北側の第III-3層面で検出された。直径4mの円形範囲内に直径約5cm~12cmの礫が集中して確認された。深さ6cm~24cmで円形に掘りこまれており、埋土に大量の礫が混入している。特に中央部約1.4mの範囲はやや深くなり、礫の密度が高い。集中部中央部に掘り込みのくぼみがある。

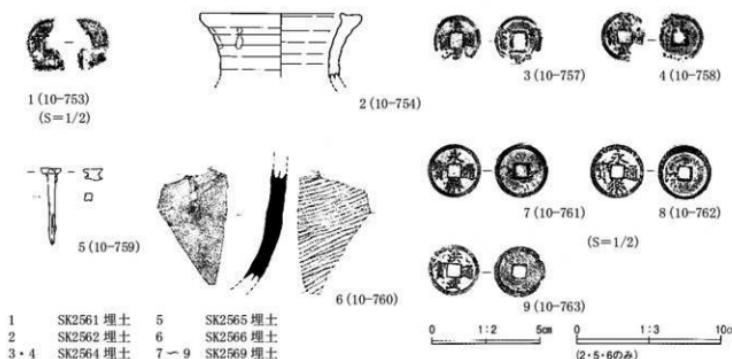
S X2570 集石遺構出土遺物 (第12図1~4、図版9)

陶器 (第12図1) : 埋土上部から出土した株洲系中世陶器片口鉢の口縁部破片である。

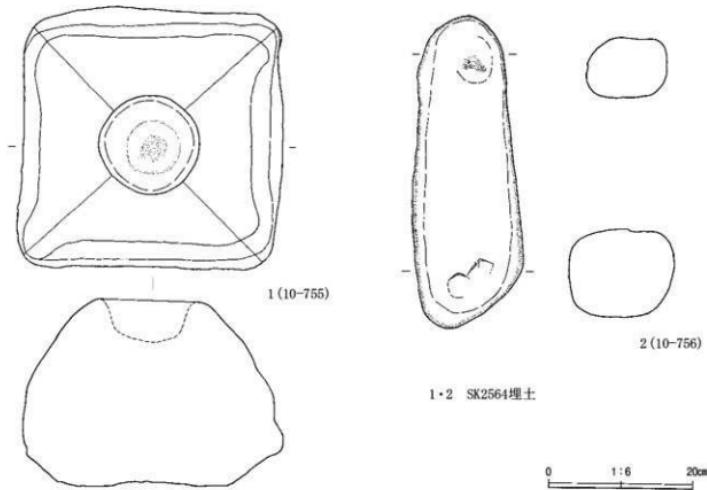
石製品 (第12図2~4) : 2~4はいずれも埋土出土の礫である。2は「世カ」、3は「薩カ」、4は「無カ」の墨書きがある。一字一石絆を構成する絆石であると考えられる。



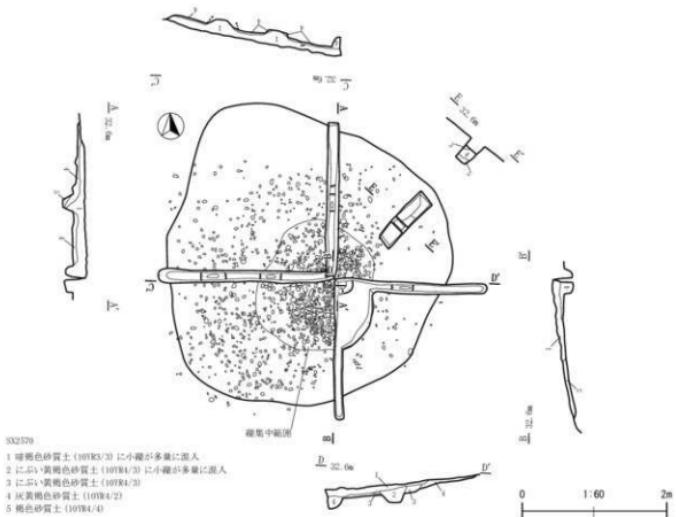
第8図 SK2561～SK2569 土坑



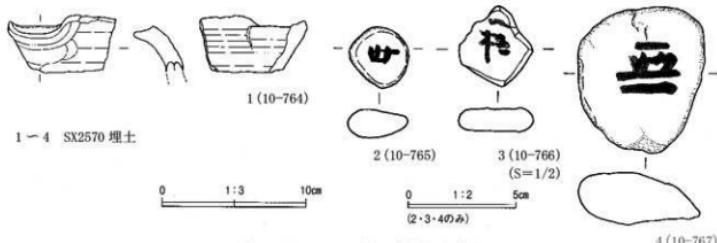
第9図 SK2561～SK2569 土坑出土遺物



第10図 SK2564 土坑出土石製品



第11図 SX2570 集石遺構



第12図 SX2570 集石遺構出土遺物

②第IV層面検出の遺構と遺物

SK2571 土坑 (第13図、図版5)

調査区北サブトレーンチ内、第IV層面で検出された。長軸1.2m以上、短軸60cm、深さ30cm。梢円形を呈する。埋土から火葬骨片がまとまって出土している。

SK2572 土坑 (第13図、図版5)

調査区中央サブトレーンチ内、第IV層面で検出された。長軸1.9m以上、短軸1.2m、深さ1.2m。梢円形を呈する。埋土から骨片が出土している。

S K2572 土坑出土遺物 (第14図1~11、図版10)

陶器 (第14図1) : 埋土から出土した肥前系陶器の壺体部破片である。外面は鉛釉地に黒釉薬がかかること。

銭貨 (第14図2~10) : 2~10は埋土出土の銭貨である。いずれも模鋳銭と考えられる。2~7の6枚は癒着し重なった状態で出土している。2は皇宋通寶(南宋、初鑄1253年)、3・8は祥符元寶(北宋、初鑄1099年)、4は元豐通寶(北宋、初鑄1078年)、5は元符通寶(北宋、初鑄1098年)、6・9・10は熙寧元寶(北宋、初鑄1068年)、7は廢棄により錢文不明である。

鉄製品 (第14図11) : 埋土出土の釘である。木材が付着・遺存している。

S K2573 土坑 (第13図、図版5)

調査区中央サブトレーンチ内、第IV層面で検出された。長軸1.9m以上、短軸1.2m、深さ1.2m。梢円形を呈する。埋土から骨片が出土している。

S K2573 土坑出土遺物 (第14図12~25、図版10)

陶器 (第14図12) : 珠洲系中世陶器の壺体部破片である。外面に平行叩き目、内面に無文の當て具痕がある。

銭貨 (第14図13~23) : 13~23は埋土出土の銭貨である。13は永樂通寶(明、初鑄1408年)、14は淳熙元寶(南宋、初鑄1174年)、15・20は紹聖元寶(北宋、初鑄1094年)、16・17・19は元豐通寶(北宋、初鑄1078年)、18は祥符元寶(北宋、初鑄1009年)、21は政和通寶(北宋、初鑄1111年)、22は開元通寶(唐、初鑄621年)である。23は元祐通寶(北宋、初鑄1086年)である。いずれも模鋳銭と考えられる。

木製品 (第14図24・25) : 24、25ともに埋土出土の板状の木製品である。24は人骨と15~17の銭貨が、また25は18~23の銭貨が乗った状態で出土している。また15と17は癒着した状態で出土している。出土状況から、人骨とこれらの銭貨を納めた収納物(木棺)の部材であると考えられる。

S K2574 土坑 (第13図、図版5)

調査区中央サブトレーンチ内、第IV層面で検出された。長軸1.2m以上、短軸60cm、深さ40cm。梢円形を呈する。埋土からわずかに骨片が出土している。

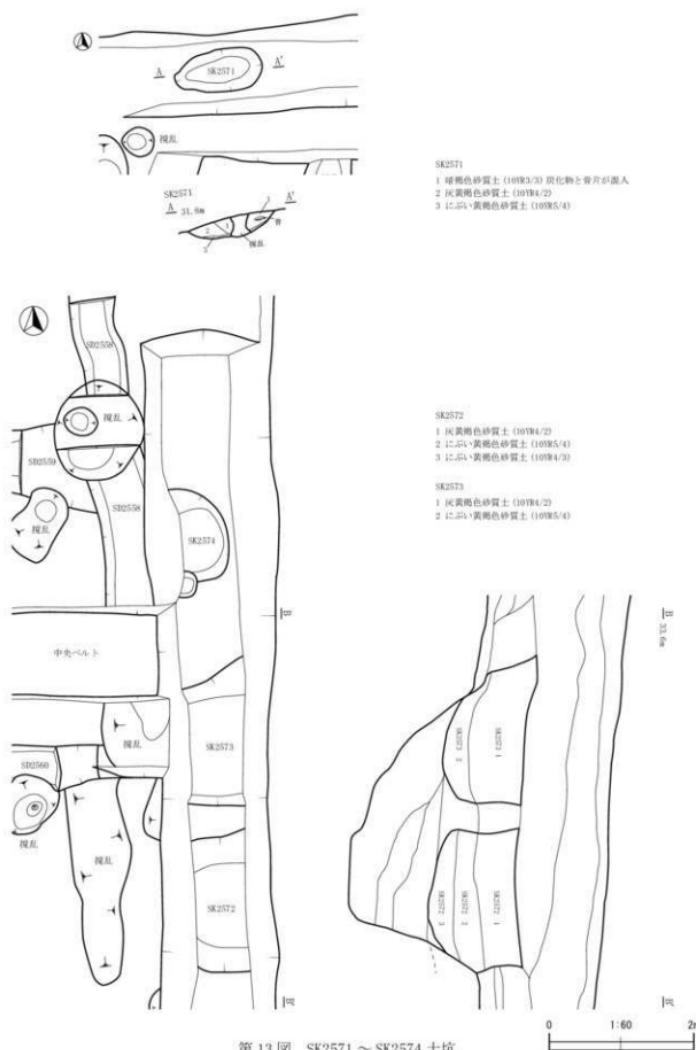
S K2574 土坑出土遺物 (第14図26~31、図版10)

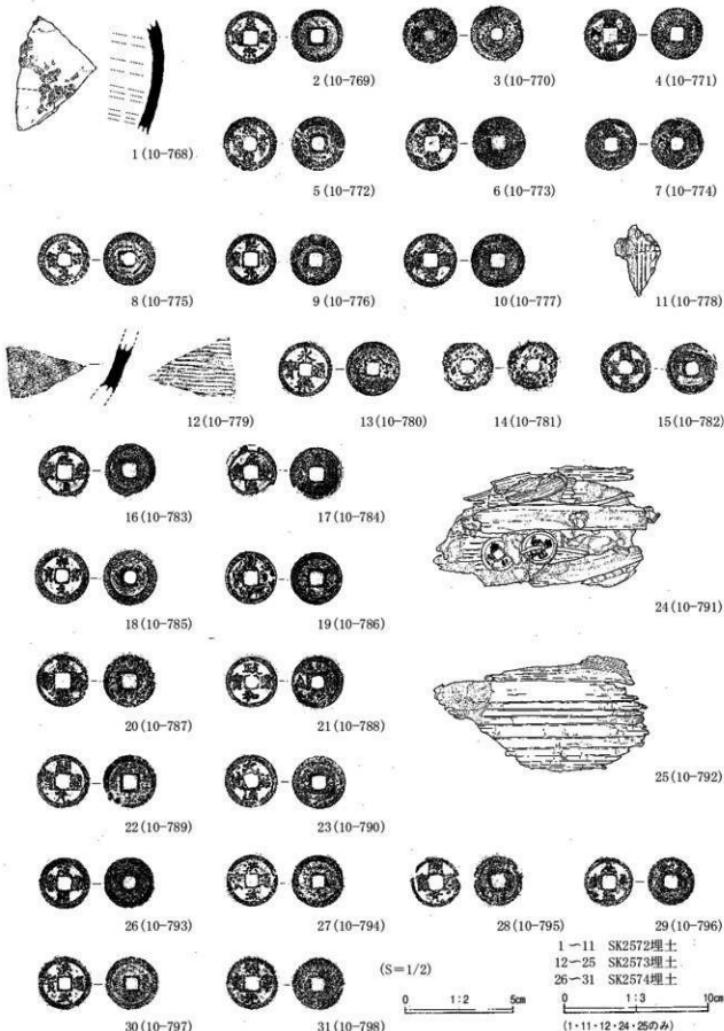
銭貨 (第14図26~31) : いずれも埋土出土の銭貨である。26・29は元豐通寶(北宋、初鑄1078年)、27・30は洪武通寶(明、初鑄1368年)、28は開元通寶(唐、初鑄621年)である。31は熙寧元寶(北宋、初鑄1068年)である。28~30は癒着し重なった状態で出土している。31を除き、いずれも錢文の状態や厚さから模鋳銭と考えられる。

③第VII層面検出遺構

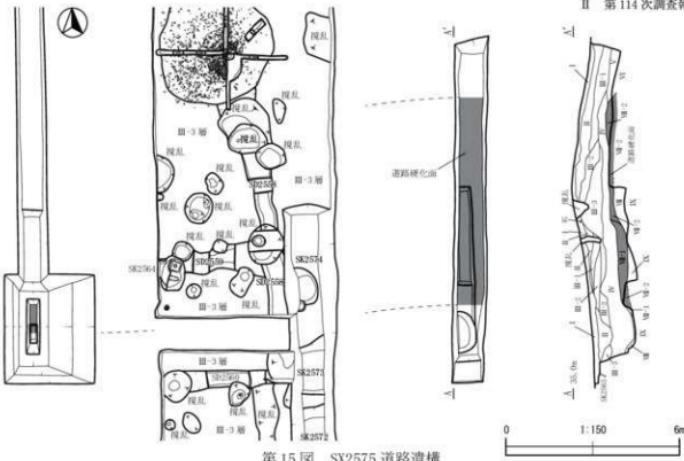
S X2575 道路遺構 (第15図、図版5)

主に拡張区①内、第VII層面の硬化面および道路整地からなる道路遺構である。第VII-1層面と第VII-2層面の2時期があり、上層の第VII-1層は南側にのみ堆積し、南北7.2mの範囲で確認される。下層の第VII-2層の道路面と整地は南北7mの範囲で確認される。にぶい褐色粘質土を主体に構成され、褐色砂質土が混じる。上面の版築状の硬化面の厚さは約10cmである。





第14図 SK2572～SK2574土坑出土遺物



3 基本層序および各層出土遺物

基本層序（第5図）

第114次調査地は、高清水丘陵北西部の末端に位置しており、旧地形は東から西へ急傾斜する地形であつたと考えられる。中世段階の土地利用に伴う地形変更や、現代になり周辺地が邸宅の庭園として利用された際の造成・削平により、現状は東から西へ段状に低くなっている。

以上の土地利用状況を踏まえて、第114次調査地の基本層序をまとめると以下のようになる。

第Ⅰ層 表土：現表土、黒褐色土(10YR3/2)。調査地全体を覆う。

第Ⅱ層 造成土：近世以降の造成土、暗褐色砂質土(10YR3/3)。調査地全体で覆う。擾乱を検出している。

第Ⅲ層 中世整地層：中世から近世にかけての整地に伴う造成土。以下のように細分される。

第Ⅲ-1層 中世整地1：中世末から近世初めの整地層。にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)。調査地中央のみに堆積。φ5mm～12mmの明褐色粘土ブロック(7.5YR5/6)混じる。小礫を多数含む。

第Ⅲ-2層 中世整地2：明褐色粘質土(7.5YR5/6)拡張区①の盛り上がりった箇所のみに堆積。土手状の道路整地の可能性がある。

第Ⅲ-3層 中世整地3：にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)。調査地全体で検出される。SD2558～SD2560、SK2561～SK2569、SX2570が検出された。

第Ⅳ層 中世整地層：にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)。掘り下げ部より検出されており、調査地全体に堆積していると考えられる。SK2571、SK2572～SK2574が検出された。

第Ⅴ層 飛砂層：黄褐色砂(10YR5/6)。自然堆積層。古代から中世にかけて堆積したと考えられる。斜面下部に特に厚く堆積していると考えられる。

第VI層 古代整地層：褐砂質土(10YR4/4)。古代最上層の遺物包含層。

第VII層 古代整地層：古代の整地層。SX2571道路造成に関わる整地層であると考えられる。

第VII-1層 古代整地層：褐色粘質土（7.5YR4/4）。SX2571の上部、周辺にのみ堆積。しまりが強くSX2571の補修等に関わる造成土であると考えられる。

第VII-2層 道路造成土：ぶい褐色粘質土（7.5YR5/4）。SX2571を構成する整地層。しまりが強く上面は硬化しており、道路造成土であると考えられる。上面は特に平らに整地されている。

第VIII層 古代整地層：褐色砂質土（10YR4/6）。古代最下層の遺物包含層。

第IX層 地山粘土層：明黄褐色粘土（10YR6/8）。調査地全体で地山となっている。

各層出土遺物

第I層 出土遺物（第16図1～6、図版11）

陶器（第16図1～4）：1は瀬戸・美濃系陶器の灰釉小皿の体部から底部破片である。簡略化された削り出し高台で、外面にオーリー色釉が施釉されている。2は珠洲系中世陶器の壺鉢底部破片である。内面に卸目がある。3は珠洲系中世陶器の壺頸部～体部破片である。外面に平行叩き目があり、内面に無文の当て具痕がある。4は肥前系陶器の壺肩部破片である。外面に胎釉がかかり、耳部が欠損している痕跡がある。

銭貨（第16図5～6）：5は無紋銭、6は紹聖元寶（北宋、初鈔1094年）である。6は錢文不鮮明で、模鋳銭であると考えられる。

第II層 出土遺物（第16図7～13、図版11）

磁器（第16図7）：中国産青磁碗の体部破片である。

陶器（第16図8～12）：8は珠洲系中世陶器の壺体部破片である。外面に平行叩き目、内面に無文の当て具痕がある。9は珠洲系中世陶器の壺体部破片である。外面に平行叩き目、内面に無文の当て具痕がある。10は珠洲系中世陶器の壺肩部破片である。外面平行叩き目があり、内面にナデが施されている。11は肥前系陶器壺の肩部から体部破片である。外面は胎釉の地に鉄釉が施釉されている。耳部が欠損している痕跡がある。12は瓷器系中世陶器壺の口縁部破片である。外面上に灰色～緑灰色の自然釉がかかる。

石製品（第16図13）：板状の石製品である。表面に掘り込みによる文様がある。

第III層 出土遺物（第16図14～18、図版11）

陶器（第14図14～17）：14は珠洲系陶器の壺鉢底部下端破片である。内面に卸目が施されている。15は珠洲系陶器の壺体部破片である。外面に平行叩き目、内面に無文の当て具痕がある。16は肥前系陶器の壺頸部～体部破片である。外面は胎釉の地に鉄釉が施釉されている。耳部が欠損している痕跡がある。17は肥前系陶器の壺頸部～体部破片である。外面は胎釉の地に鉄釉が施釉されている。

石製品（第14図18）：閃緑岩製の石製品である。宝筐印塔の笠部破片であると考えられる。

第IV層 出土遺物（第17図1～4、図版11）

鉄製品（第17図1～4）：1～4いずれも釘であり、木材が付着・遺存している。

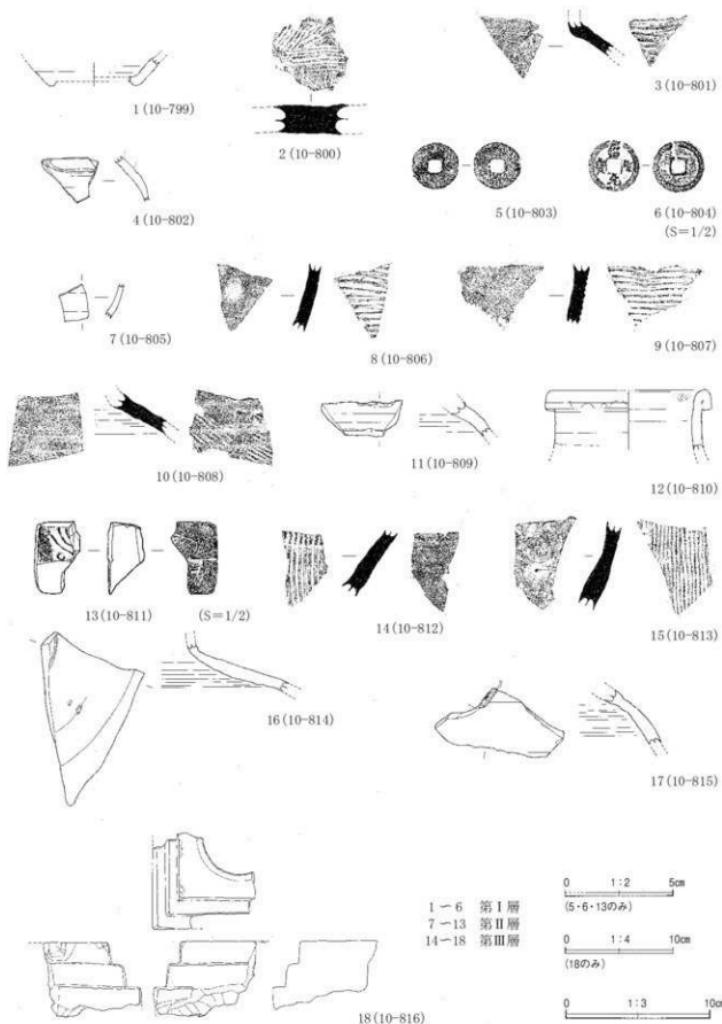
第VI層 出土遺物（第17図5、第18図1、図版11）

土師器（第17図5）：坏底部破片であり、底部回転糸切り後ナデ調整を施す。内面は体部に縦位、底部に横位のミガキ調整、黒色処理を施す。底部回転糸切り、ナデ調整。

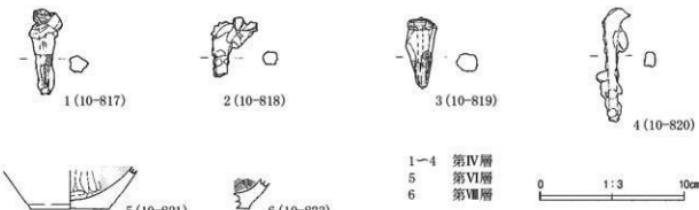
瓦（第18図1）：凸面はナデ調整、凹面は布目压痕がある。いぶし焼成により黒色を呈し、焼成は軟質である。摩耗している。

第VII層 出土遺物（第17図6、図版11）

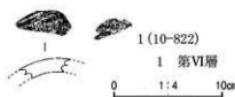
土師器（第17図6）：壺底部破片であり、内面にハケ目調整がある。



第16図 第114次調査地第I層—第III層出土遺物



第17図 第114次調査地第IV層・第VI層・第VII層出土遺物



第18図 第114次調査地第VI層出土瓦

表3 第114次調査地検出遺構一覧

遺構No.	前面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備考
SD2558	第6図	III-3	近世 以降	SD2559・SD2560→ →SX2570	幅72cm～80cm、長さ6m以上。深さ8cm。北で西に12°振れる。南北方向。
SD2559	第6図	III-3	近世 以降	SX2564→ →SD2558	幅80cm、長さ4.4m以上。深さ8cm。北で東に14°振れる。東西方向。
SD2560	第6図	III-3	近世 以降	→SD2558	幅48cm～56cm、長さ4.6m以上。深さ14cm～34cm。東西方向。
SK2561	第8図	III-3	中世 以降		長軸1.2m、短軸80cm。深さ36cm。楕円形。
SK2562	第8図	III-3	中世 以降		長軸1.4m、短軸1.2m。深さ54cm。円形。
SK2563	第8図	III-3	中世 以降		長軸1.2m、短軸60cm。深さ36cm。楕円形。
SK2564	第8図	III-3	中世 以降	→SD2559	長軸1.2m、短軸80cm。深さ36cm。楕円形。
SK2565	第8図	III-3	中世 以降		長軸72cm、短軸54cm。深さ24cm。楕円形。
SK2566	第8図	III-3	中世 以降		長軸54cm以上、短軸60cm。深さ27cm。楕円形。
SK2567	第8図	III-3	中世 以降		直径70cm。深さ20cm。円形。
SK2568	第8図	III-3	中世 以降		長軸54cm以上、短軸60cm。深さ27cm。楕円形。
SK2569	第8図	III-3	中世 以降		長軸1m以上、短軸90cm。深さ18cm。楕円形。
SX2570	第11図	III-3	中世 以降		直径4m。深さ6cm～24cm。円形。
SK2571	第13図	IV	中世 以降		長軸1.2m以上、短軸60cm。深さ30cm。楕円形。
SK2572	第13図	IV	中世 以降		長軸1.9m、短軸1.2m以上。深さ1.2m。楕円形。
SK2573	第13図	IV	中世 以降		長軸1.9m、短軸1.2m以上。深さ1.2m。楕円形。
SK2574	第13図	IV	中世 以降		長軸1.2m、短軸60cm以上。深さ40m。楕円形。
SX2575	第15図	VII層 古代			幅7.2m以上。道路遺構。

例1 SA0000→ 当該遺構がSA0000より新しい

例2 →SA0000 当該遺構がSA0000より古い

表4 第114次調査地出土遺物属性表(1)

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	備考
10-749	第7回1	図版9-1	SD2558埋土		陶器	甕				床脚系中世陶片。頸部~体部破片。外 由平筋で司紋。内面に無文の当て具組。
10-750	第7回2	図版9-2	SD2558埋土		鉄貨	元豐通寶				模範鉄。南北、初跨1078年。外縁外径 22.0cm、内縁外径19.6cm、外縁厚 1.0cm、重量3.0g。
10-751	第7回3	図版9-3	SD2558埋土		鉄貨	寛永通寶				古灰瓦。直径16.3cm。外縁外径 23.5mm、内縁外径16.6mm、外縁厚 1.0mm、重量3.0g。
10-752	第7回4	図版9-4	SD2560埋土		陶器	甕				床脚系中世陶片。頸部~体部破片。 模範鉄。明、初跨1368年。外縁外径 22.0cm、内縁外径19.6cm、外縁厚 0.9mm、重量1.0g。
10-753	第9回1	図版9-5	SK2561埋土		鉄貨	大義通寶				袁裕系中世陶片。口部から頸部破 片、外面に自然縫。
10-754	第9回2	図版9-6	SK2562埋土		陶器	甕	10.8			砂輪製。五輪塔の火壺。
10-755	第10回1	図版9-7	SK2564埋土		石製品	五輪塔				花崗岩製。神像。
10-756	第10回2	図版9-8	SK2564埋土		石製品	不明				被覆瓦。被覆瓦あり。
10-757	第9回3	図版9-9	SK2564埋土		錢	洪武通寶				明、初跨1368年。外縁外径 22.0cm、内縁外径19.6cm、外縁厚 0.9mm、重量1.0g。
10-758	第9回4	図版9-10	SK2564埋土		錢	洪武通寶				被覆瓦。明、初跨1368年。外縁外径 22.0cm、内縁外径19.6mm、外縁厚 0.9mm、重量2.0g。
10-759	第9回5	図版9-11	SK2565埋土		鉄製品	釘				下端丸頭。
10-760	第9回6	図版9-12	SK2566埋土		陶器	甕				床脚系中世陶片。外縁外径、内縁外 径に無文の当て具組。
10-761	第9回7	図版9-13	SK2569埋土		鉄貨	永樂通寶				明、初跨1402年。外縁外径21.0mm、内 縁外径6.0mm、外縁厚1.0mm、重量 3.0g。
10-762	第9回8	図版9-14	SK2569埋土		鉄貨	永樂通寶				明、初跨1402年。外縁外径21.0mm、内 縁外径5.5mm、外縁厚1.0mm、重量 3.0g。
10-763	第9回9	図版9-15	SK2569埋土		鉄貨	洪武通寶				明、初跨1368年。外縁外径21.0mm、内 縁外径6.0mm、外縁厚1.0mm、重量 3.0g。
10-764	第12回1	図版9-16	SK2570埋土		陶器	片口鉢				床脚系中世陶片。口部破片。
10-765	第12回2	図版9-17	SK2570埋土		石製品	石製品				絆石。(「止」の墨書き入り。チャート岩 絆石。(「隠」の墨書き入り。チャート岩 絆石。(「則」の墨書き入り。月浦遊 記)。
10-766	第12回3	図版9-18	SK2570埋土		石製品					被覆瓦。被覆瓦あり。
10-767	第12回4	図版9-19	SK2570埋土		石製品					被覆瓦。被覆瓦あり。
10-768	第14回1	図版10-1	SK2572埋土		陶器	三耳壺				被覆瓦。被覆瓦あり。
10-769	第14回2	図版10-2	SK2572埋土		鉄貨	皇宋通寶				被覆瓦。南北、初跨1253年。外縁外径 24.0cm、内縁外径7.0mm、外縁厚 1.0mm、重量4.0g。
10-770	第14回3	図版10-3	SK2572埋土		鉄貨	祥符元寶				被覆瓦。南北、初跨1009年。外縁外径 25.0cm、内縁外径7.0mm、外縁厚 0.9mm、重量3.0g。
10-771	第14回4	図版10-4	SK2572埋土		鉄貨	元豐通寶				被覆瓦。南北、初跨1068年。外縁外径 24.0cm、内縁外径7.0mm、外縁厚 0.9mm、重量3.0g。
10-772	第14回5	図版10-5	SK2572埋土		鉄貨	元豐通寶				被覆瓦。南北、初跨1068年。外縁外径 25.0cm、内縁外径7.0mm、外縁厚 0.9mm、重量3.0g。
10-773	第14回6	図版10-6	SK2572埋土		鉄貨	熙寧元寶				被覆瓦。南北、初跨1068年。外縁外径 24.0cm、内縁外径7.0mm、外縁厚 0.9mm、重量3.0g。
10-774	第14回7	図版10-7	SK2572埋土		鉄貨	不 ^明				被覆瓦。壁面に墨書き文。外縁外 径24.0mm、内縁内径6.0mm、外縁厚 0.9mm、重量3.0g。
10-775	第14回8	図版10-8	SK2572埋土		鉄貨	祥符元寶				被覆瓦。南北、初跨1009年。外縁外径 24.0cm、内縁外径6.0mm、外縁厚 0.9mm、重量3.0g。
10-776	第14回9	図版10-9	SK2572埋土		鉄貨	熙寧元寶				被覆瓦。南北、初跨1068年。外縁外径 24.0cm、内縁外径7.0mm、外縁厚 0.9mm、重量3.0g。
10-777	第14回10	図版10-10	SK2572埋土		鉄貨	熙寧元寶				被覆瓦。南北、初跨1068年。外縁外径 24.0cm、内縁外径7.0mm、外縁厚 0.9mm、重量3.0g。
10-778	第14回11	図版10-11	SK2572埋土		鉄製品	釘				木質付舟。
10-779	第14回12	図版10-12	SK2573埋土		陶器	甕				床脚系中世陶片。体部破片。外面平行 叩き板。内面に無文の当て具組。
10-780	第14回13	図版10-13	SK2573埋土		鉄貨	永樂通寶				被覆瓦。明、初跨1402年。外縁外径 24.5cm、内縁外径19.6cm、外縁厚 0.9mm、重量3.0g。
10-781	第14回14	図版10-14	SK2573埋土		鉄貨	淳熙元寶				被覆瓦。南北、初跨1174年。外縁外径 24.0cm、内縁外径6.0mm、外縁厚 1.0mm、重量2.0g。
10-782	第14回15	図版10-15	SK2573埋土		鉄貨	紹聖元寶				被覆瓦。南北、初跨1094年。外縁外径 24.0cm、内縁外径6.0mm、外縁厚 0.9mm、重量2.0g。
10-783	第14回16	図版10-16	SK2573埋土		鉄貨	元豐通寶				被覆瓦。南北、初跨1009年。外縁外徑 23.5cm、内縁外径7.0mm、外縁厚 1.0mm、重量3.0g。
10-784	第14回17	図版10-17	SK2573埋土		鉄貨	元豐通寶				被覆瓦。南北、初跨1009年。外縁外徑 24.0cm、内縁外径7.0mm、外縁厚 0.9mm、重量2.0g。

II 第114次調査報告

表5 第114次調査地出土遺物属性表(2)

遺物No.	図番号	写真図版	出土点 層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	備考
10-785	第14図18	図版10-18	SK2573埋土		鉢	絆元寶				模跡鉢。北宋。初鉢1009年。外縁外径25.0mm、内鉢内径8.0mm、外縁厚0.9mm、重量3.0g。
10-786	第14図19	図版10-19	SK2573埋土		鉢	元豐通寶				模跡鉢。北宋。初鉢1078年。外縁外径24.0mm、内鉢内径8.7mm、外縁厚1.0mm、重量3.0g。
10-787	第14図20	図版10-20	SK2573埋土		鉢	紹聖元寶				模跡鉢。北宋。初鉢1094年。外縁外径24.0mm、内鉢内径8.7mm、外縁厚1.0mm、重量3.0g。
10-788	第14図21	図版10-21	SK2573埋土		鉢	政和通寶				模跡鉢。北宋。初鉢1111年。外縁外径24.0mm、内鉢内径8.6mm、外縁厚1.0mm、重量2.0g。
10-789	第14図22	図版10-22	SK2573埋土		鉢	開元通寶				模跡鉢。唐。初鉢621年。外縁外径24.0mm、内鉢内径8.7mm、外縁厚1.0mm、重量2.0g。
10-790	第14図23	図版10-23	SK2573埋土		鉢	元祐通寶				模跡鉢。北宋。初鉢1086年。外縁外径24.0mm、内鉢内径8.7mm、外縁厚1.0mm、重量3.0g。
10-791	第14図24	図版10-24	SK2573埋土		大製品					漆材。
10-792	第14図25	図版10-25	SK2573埋土		大製品					模跡鉢。北宋。初鉢1078年。外縁外径24.0mm、内鉢内径8.7mm、外縁厚1.0mm、重量3.0g。
10-793	第14図26	図版10-26	SK2574埋土		鉢	元豐通寶				模跡鉢。明。初鉢1368年。外縁外径24.0mm、内鉢内径8.6mm、外縁厚1.0mm、重量3.0g。
10-794	第14図27	図版10-27	SK2574埋土		鉢	洪武通寶				模跡鉢。明。初鉢1368年。外縁外径24.0mm、内鉢内径8.6mm、外縁厚1.0mm、重量3.0g。
10-795	第14図28	図版10-28	SK2574埋土		鉢	開元通寶				模跡鉢。唐。初鉢621年。外縁外径23mm、内鉢内径6.0mm、外縁厚0.9mm、重量2.0g。
10-796	第14図29	図版10-29	SK2574埋土		鉢	元祐通寶				模跡鉢。北宋。初鉢1078年。外縁外径23.0mm、内鉢内径8.5mm、外縁厚0.9mm、重量2.0g。
10-797	第14図30	図版10-30	SK2574埋土		鉢	洪武通寶				模跡鉢。明。初鉢1368年。外縁外径24.0mm、内鉢内径8.6mm、外縁厚0.9mm、重量3.0g。
10-798	第14図31	図版10-31	SK2574埋土		鉢	熙寧元寶				模跡鉢。北宋。初鉢1068年。外縁外径24.0mm、内鉢内径8.7mm、外縁厚1.2mm、重量3.0g。
10-799	第16図1	図版11-1	I層	PK132	陶器	灰釉小皿		S.6		模跡鉢。唐。内面にオーバー色の糊跡有。底部無。断面焼成した割り出しが見当。
10-800	第16図2	図版11-2	I層	PQ~PR132	陶器	溜り鉢				珠洲系中世陶器。底部破片。内面に印し目。
10-801	第16図3	図版11-3	I層	PQ~PR132	陶器	甕				珠洲系中世陶器。溜り~底部破片。外縁厚0.5mm、内面無文。
10-802	第16図4	図版11-4	I層	PK132	陶器	壺				肥前系陶器。底部無。
10-803	第16図5	図版11-5	I層	PK133	鉢	無文鉢				外縁外径22.0mm、内鉢内径6.0mm、外縁厚0.9mm、重量2.0g。
10-804	第16図6	図版11-6	I層	QC133	鉢	紹聖元寶				模跡鉢。北宋。初鉢1094年。外縁外径24.0mm、内鉢内径8.5mm、外縁厚1.0mm、重量3.0g。
10-805	第16図7	図版11-7	II層	PK132	磁器	青磁碗				珠洲系中世陶器。底部破片。
10-806	第16図8	図版11-8	II層	PR131	陶器	甕				珠洲系中世陶器。底部破片。外縁平行引き目。内面無文。
10-807	第16図9	図版11-9	II層	QA132	陶器	甕				珠洲系中世陶器。底部破片。外縁平行引き目。内面無文。
10-808	第16図10	図版11-10	II層	QA132	陶器	甕				珠洲系中世陶器。底部破片。外縁平行引き目。内面ナチュラル。
10-809	第16図11	図版11-11	II層	PO132	陶器	三耳壺				肥前系中世陶器。肩部破片。肩部から体部破片。外縁斜削輪郭。
10-810	第16図12	図版11-12	II層	PT130	陶器	甕				肥前系中世陶器。口縁破片。内外面に灰色~緑灰色の自然釉。
10-811	第16図13	図版11-13	II層	QB132	石製品	不明				泥岩岩質。表面彫り込みによる文様あり。
10-812	第16図14	図版11-14	壁面	QB132	陶器	溜り鉢				珠洲系中世陶器。底部破片。内面に印し目。
10-813	第16図15	図版11-15	壁面	PO~PP132	陶器	甕				珠洲系中世陶器。底部破片。外縁平行引き目。内面無文。
10-814	第16図16	図版11-16	壁面	PO~PP133	陶器	三耳壺				肥前系陶器。頸部~底部破片。外縁斜削輪郭。
10-815	第16図17	図版11-17	壁面	PO~PP132	陶器	三耳壺				肥前系陶器。頸部~底部破片。外縁斜削輪郭。
10-816	第17図18	図版11-18	壁面	PF133	石製品	宝鏡印塔				珠洲系中世陶器。底部回転糸孔から後側破片。外縁斜削輪郭。
10-817	第17図19	図版11-19	IV層	PF135	石製品	釘				肥前系陶器。底部無。外縁斜削輪郭。
10-818	第17図20	図版11-20	IV層	PF135	石製品	釘				珠洲系中世陶器。底部無。
10-819	第17図21	図版11-21	IV層	PF135	石製品	釘				白画面は手彫刻。画面は白目压成。黒色(いぶし)焼成。款识。摩耗している。
10-820	第17図22	図版11-22	IV層	PF135	石製品	釘				内面にハケ目調査。
10-821	第17図23	図版11-24	VI層	PO132	土師器	甕				
10-822	第18図1	図版11-23	VI層	PF135	丸瓦					
10-823	第17図25	図版11-25	壁面	PF135	土師器	甕				

III 第 115 次調査報告

1 調査経過

第 115 次調査は、焼山地区北西部を対象に、令和 2 年 8 月 17 日から 10 月 28 日まで調査を実施した。調査面積は 242 m²である。

第 115 次調査地は、外郭西門跡の南東側、外郭西辺の城内側隣接地である（第 1 図・第 19 図）。周辺においてはこれまで、外郭西門跡とそれに取り付く外郭区画施設が検出されている。外郭西辺として、第 14 次調査（昭和 49 年度）・第 19 次調査（昭和 51 年度）・第 52 次調査（昭和 63 年度）・第 86 次調査（平成 17 年度）では、外郭西門に向かって南北方向に延びる築地塀および材木塀が検出されている。また、第 102 次調査（平成 24 年度）では、外郭西門北側に取り付く外郭区画施設が検出されている。それらは、8 世紀末以降に構造が築地塀から材木塀へ変遷していることが確認されている。

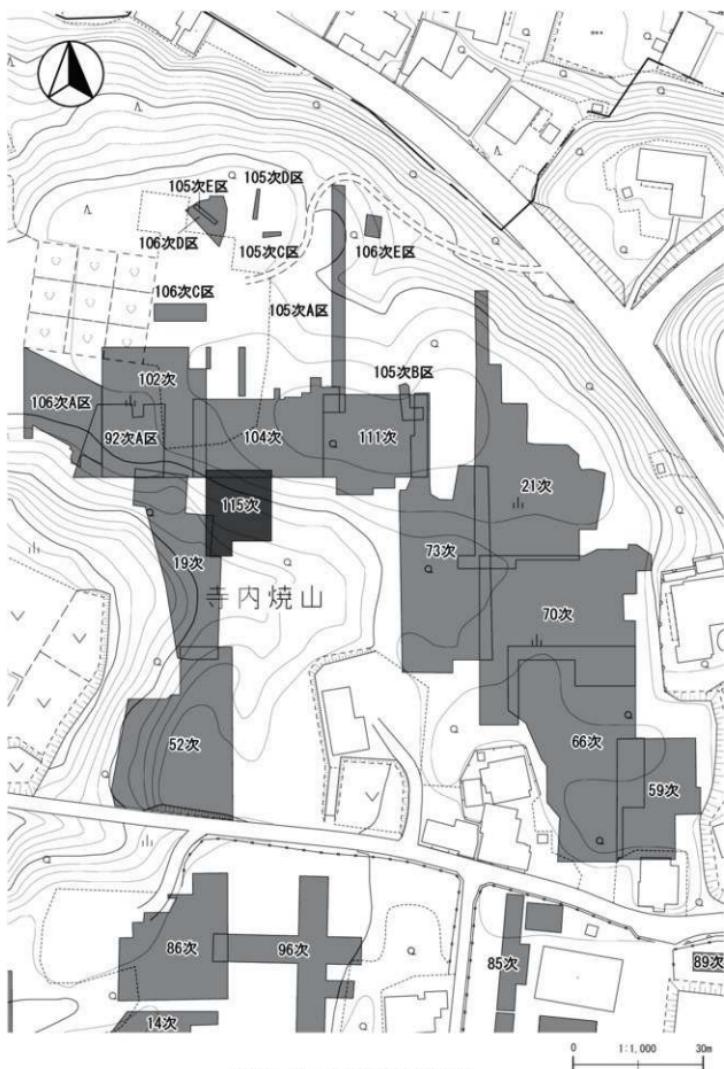
今回調査を行った第 115 次調査地の旧地形は、北から南へ緩やかに低くなる傾斜面であったと考えられる。現況は近世以降の耕作に伴う造成や、近現代の削平により、現在は北から南へ段状に低くなっている。調査区については、東西 14m × 南北 20m に設定した。さらに、調査目的であった区画施設の確認を行うため、南西の区画を東西 6 m × 3 m 広く設定した。

調査方法は、面的掘り下げを行い遺構の検出確認を行った後、時期等遺構内容の把握が必要な検出遺構については、保存に留意しながらベルト等を残す形で掘り下げ、調査を行った。また下層遺構を追究する必要がある部分については、記録化後、部分的に掘り下げを行った。

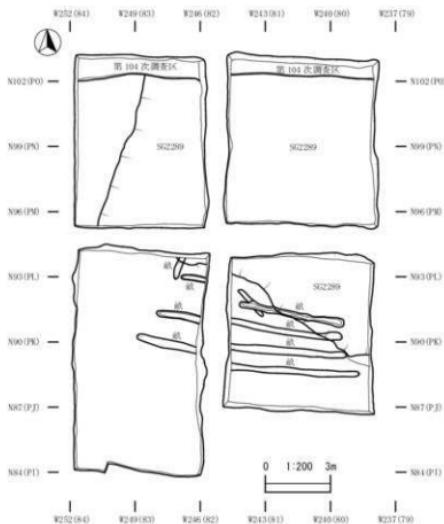
調査の準備は、第 114 次調査と並行しながら行った。調査地の樹木の伐採など整備を行った後、基準杭測量、調査区の設定を行った。調査区設定後、重機による表土・造成土の除去を行った（8 月 17 日～8 月 21 日）。その後、人手による表土・造成土の除去を行っていった。この時点で、調査地の北側から中央にかけて大規模な土取りが行われており、遺構や包合層が大きく削平されている状況を確認した。8 月 29 日に発掘体験調査教室を開催し、14 人の参加があった。造成土の除去後、調査区の南側で近世以降の耕作土であると考えられる第 III 層を検出し、近世～近代にかけての歯跡を検出した（8 月 22 日～8 月 31 日、第 20 図）。検出されていた搅乱および歯跡を掘り下げた後、調査区中央部において中世以降に堆積したと考えられる第 IV 層を検出した。第 IV 層で SK2576 を検出し、記録化後、第 IV 層を除去し、最上層の古代整地層である第 V 層を検出した。調査結果、調査区南西区画側で南北に延びる溝跡 SA2577 を検出した（9 月 1 日～9 月 29 日）。溝状 SA2577 の一部を掘り下げ、材木塀の布堀り構であることを把握し、記録化を行った。また並行して、調査区南東区側で土層堆積状況を確認するため、サブトレーンチを設定し、第 V 層以下の除去を行った。第 V 層を除去すると、第 VI 層を検出し、各トレーンチ内で SI2578 と SI2579 を検出した。これら堅穴建物跡の掘り下げと記録化を行った。更に、SD2577 の記録化を終えた後、調査区南西区画、南壁沿いにサブトレーンチを入れ、土層の堆積状況を確認した（9 月 30 日～10 月 15 日、第 21 図・第 22 図）。

最終状況の全景写真的撮影後、遺物の取り上げ等を行い、調査区壁ならびに土層の記録化を行った（10 月 16 日～10 月 21 日）。全調査区の記録化の後、機材撤収およびバックホーと人手による埋め戻しを行い、調査が終了した（10 月 22 日～10 月 28 日）。

III 第115次調査報告



第19図 第115次調査地周辺地形図



第20図 第115次調査地上層面検出遺構全体図

2 検出遺構と出土遺物

今次調査では、遺構として木材堆1条、竪穴建物跡2軒、土坑1基が検出された。各遺構は第IV～VII層面で検出されており、第IV層は近世以降、第V層以下は古代に造成された整地層であると考えられる。調査地北側では、第104次調査でも検出されていた近世の大きな土取り穴(SG2289)により、古代の包含層や遺構面が大きく削平されている状況が確認された。また、調査地の南側においても中世の整地や、近世以降に造成や耕作の痕跡が確認されており、古代の遺構面は大きく削平を受けていた。

以下、遺構が検出された各層ごとに遺構・遺物の記述を行う。

①第III・IV層面検出の遺構と遺物

S G2289 土取り穴 (第21図)

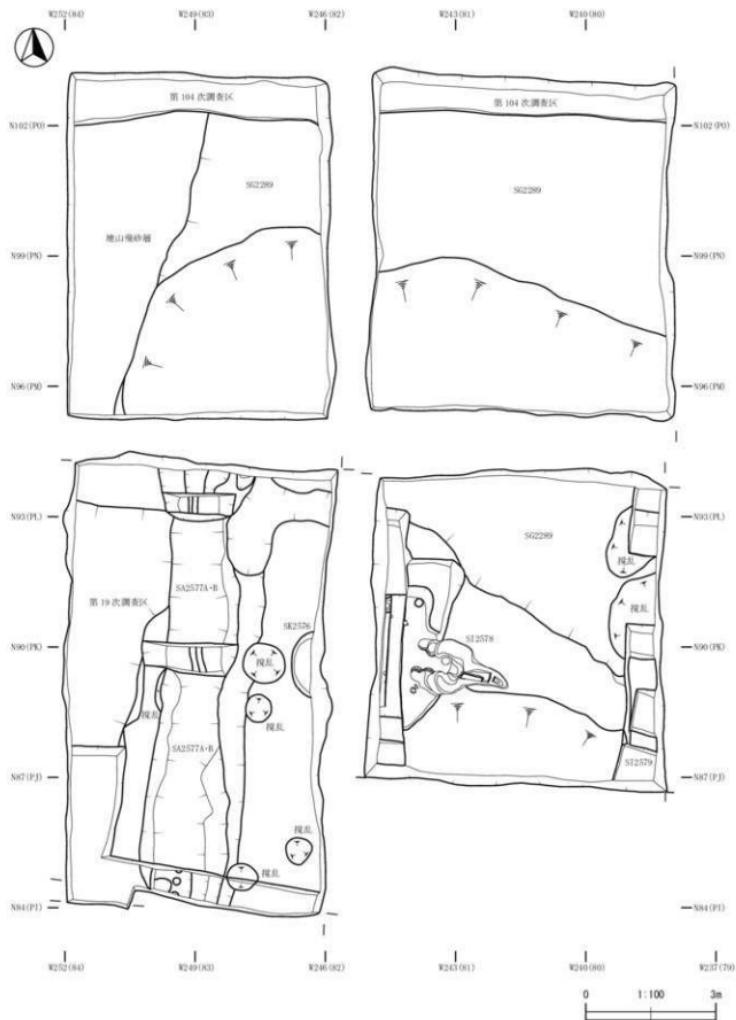
調査区北側の大半に広がる非常に大きな土取り穴で不正形を呈する。第三層面で検出された。南北13m、東西12m以上。歪な円形を呈する。

S G2289 土取り穴出土遺物 (第23図1～3、図版12)

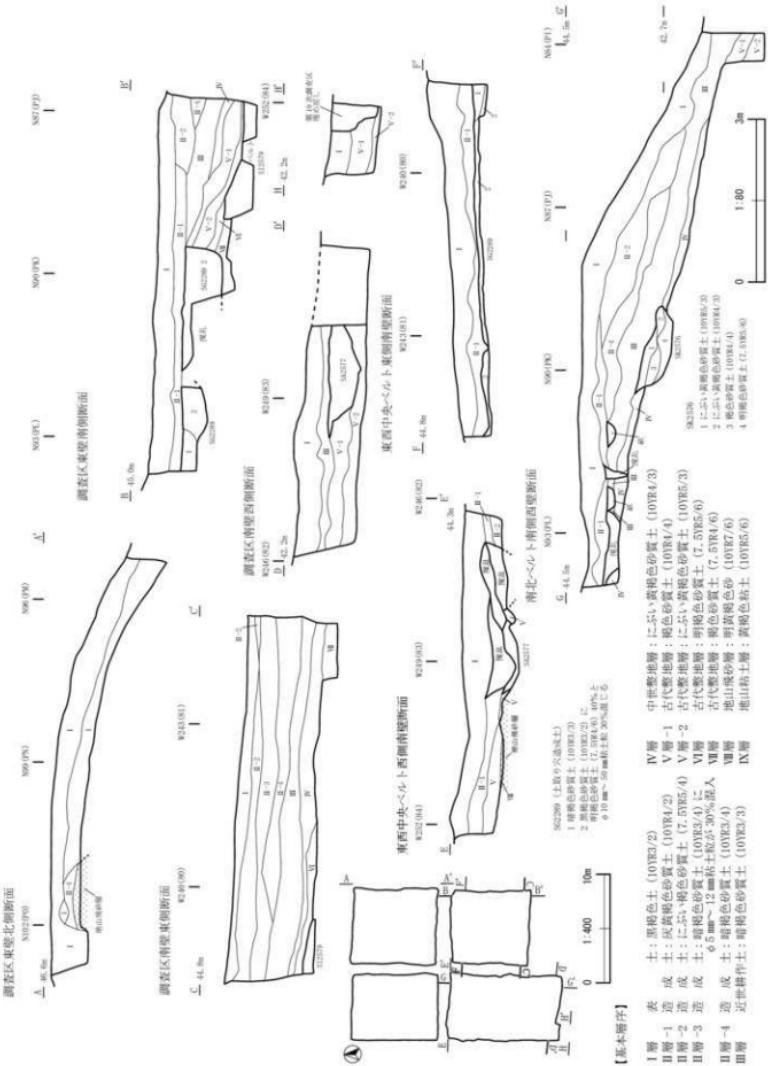
陶器 (第23図1・2) : 1は近世陶器の瓶口縁部破片である。素焼きで土師質であり、外面に花弁状の飾りがつく。2は近世陶器の碗底部破片である。外面鉄釉の地に海鼠釉をかける。内面一部に鉄釉かかっている。

銭貨 (第23図3) : 寛永通寶 (古寛永、初鑄1636年) である。

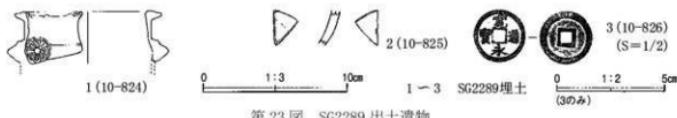
III 第 115 次調査報告



第 21 図 第 115 次調査地下層面検出構造全体図



- 27 -



第23図 SG2289出土遺物

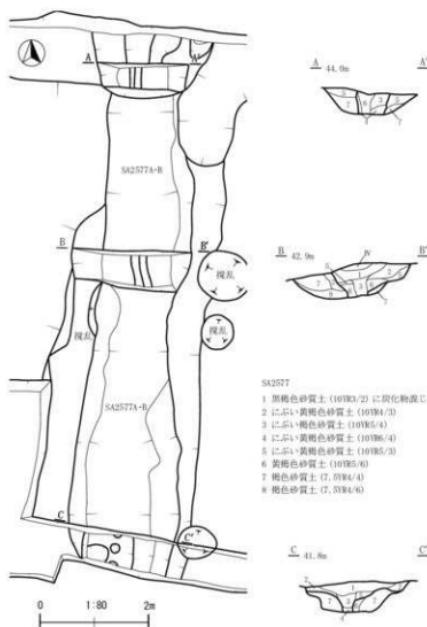
S K2576 土坑 (第21図)

調査区南西の第III層面で検出された。長軸1.7m、短軸30cm以上、深さ48cm。楕円形を呈する。

②第V層面検出の遺構と遺物

S A2577A・B材木堀跡 (第24図、図版6・7)

調査区南西の第V層面で検出された南北方向の布堀り溝跡である。幅1.7m～1.9m、長さ10m以上、深さ50cm。溝の方向は北で10° 東に振れる。材抜き取り跡や一部に丸太材痕跡が確認されていることから材木堀の布堀り溝であったと考えられる。布堀りの堀り方に新旧2時期確認され、Aが古く、Bが新しい。南側は調査区外に延び、南北方向にさらに延びると考えられるが、北側はSG2289によって大きく削平されている。



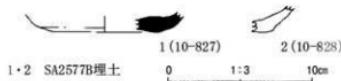
第24図 SA2577材木堀跡

S A2577B材木塙跡出土遺物 (第25図1・2、第26図1・2、図版12)

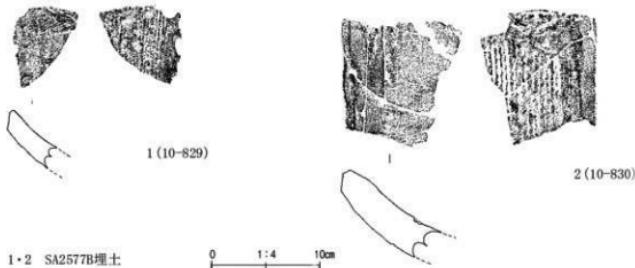
須恵器 (第25図1) : 抜き取りより出土した壺の底部破片である。ヘラ切り後軽いナゲ調整を施す。

赤褐色土器 (第25図2) : 抜き取りより出土した糸切り無調整の壺底部破片である。

瓦 (第26図1・2) : ともに抜き取りより出土した一枚作りの平瓦である。1は凸面に縄目の叩き痕と多量の砂粒、凹面には布目圧痕が見られる。糸切り痕がある。焼成は良好で灰色から青灰色を呈し、硬質である。2は凸面には縄目の叩き痕、凹面には布目圧痕が見られる。糸切り痕がある。灰色から黒色を呈し、いぶし焼成されており、軟質である。



第25図 SA2577A・B 林木塙跡出土遺物



第26図 SA2577A・B 林木塙跡出土瓦

③第VII層面検出の遺構と遺物

S 12578 積穴建物跡 (第27図、図版7・8)

調査区南東の第VII層面で検出された。上部の大半は擾乱・削平を受けており、遺残状態は悪い。南北3.2m、東西3m以上、壁高40cm以上。北壁が西で13°、北側に振れる。東側にカマドが設置されており、カマド袖に瓦が補強剤として使用されている。北壁が西で13°、北側に振れる。床面には炭化物が広がり、一部被熱している痕跡がある。

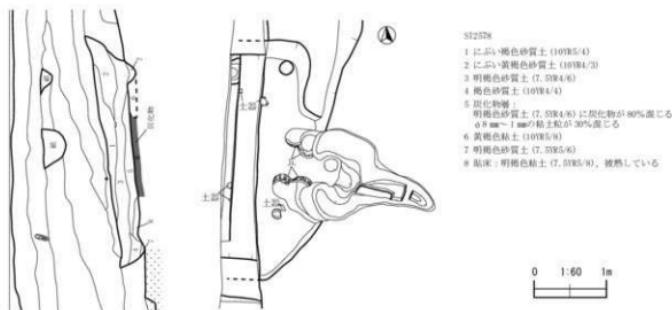
S 12578 積穴建物跡出土遺物 (第28図1~6、第29図1~6、第30図1・2、第31図1・2、図版13・14)

須恵器 (第28図1・2) : ともに床面出土の环である。1はヘラ切り後、丁寧なナデ調整を施す。内外面に煤状炭化物が付着している。2はヘラ切り後、底部外周および中位にケズリ調整を施す。内面に煤状炭化物が付着し、外面とともに強く被熱した痕跡がある。

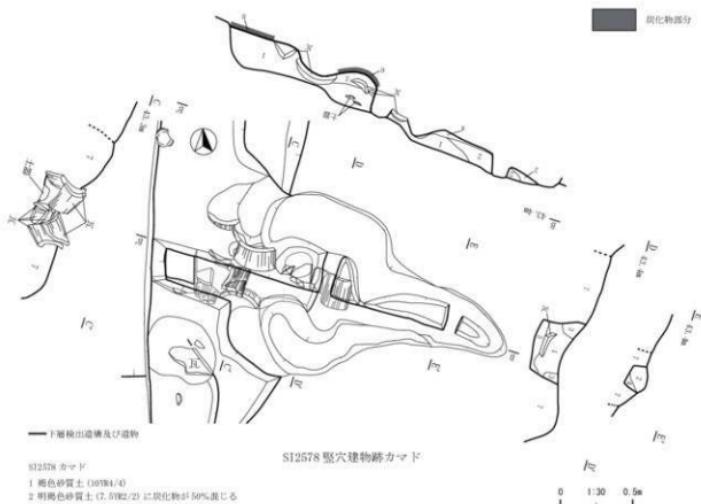
土師器 (第28図3~5) : 3・5はカマド崩壊土、4は貼床内から出土している。3は非クロロ成形の土師器环の底部である。丸底で外面に手持ちケズリ調整、内面にミガキ調整を施す。内外面に煤状炭化物が付着しており、被熱している。カマド火床内に伏せて置かれていた。4は貼床内から出土した錐体部破片である。外面に縦方向のハケ目あり。被熱している。5は平底の長胴甕の体部から底部の破片である。外面に縦方向のハケ目調整、内面に横方向のハケ目調整が施される。底部はナデ調整により圧痕不明である。

赤褐色土器 (第28図6) : カマド崩壊土出土の長胴甕口縁部から体部の破片である。外面に口縁部から頸部にかけてナデ調整が施され、体部上半にタキ成形痕がある。内面には横方向のハケ目調整が施される。

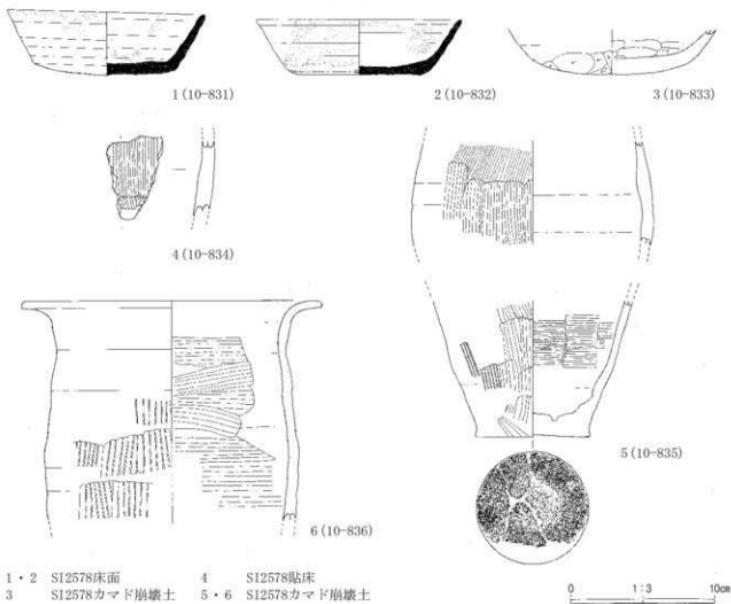
瓦 (第29図1~6、第30図1・2、第31図1・2) : 第29図1は埋土出土で、それ以外は全てカマド崩壊土出土である。6のみ丸瓦で、それ以外は凹面に糸切り痕のある一枚づくりの平瓦である。またカマド崩壊土出土の瓦は3を除き、煤状炭化物の付着や被熱痕跡から、カマド構築材だったと考えられる。1は凹面には繩目の叩き痕、凹面には布目压痕が見られる。端部には面取りが施されている。灰色を呈し、軟質である。2は凸面には繩目の叩き痕、凹面には布目压痕が見られる。焼成は良好で褐灰色を呈し、硬質であるが摩耗している。3は凸面には繩目の叩き痕、凹面には布目压痕が見られ、端部には面取りが施されている。焼成は良好で青灰色を呈し、硬質である。4は凸面には繩目の叩き痕と砂粒、凹面には布目压痕が見られる。燒成緻密であり青灰色を呈す。5は凸面には繩目の叩き痕があり、凹面には布目压痕が見られる。灰褐色を呈し、硬質である。6は丸瓦で、凸面はナデ調整。凹面は布目压痕が見られる。にぶい黄橙色を呈し、軟質である。第30図1は凸面には繩目の叩き痕、凹面には布目压痕が見られ、端部にナデ調整を施す。灰色を呈し、硬質である。2は凸面には繩目の叩き痕、凹面には布目压痕が見られる。灰白色を呈し、軟質である。一部分離し、再度被熱した痕跡がある。第31図1は凸面には繩目の叩き痕が見られ、凹面には布目压痕がある。全面にナデ調整を施す。灰色から灰白色を呈し、やや軟質である。摩耗し、煤状炭化物が付着している。第31図2は、凸面には繩目の叩き痕、凹面には布目压痕が見られる。被熱により橙色を呈すが、焼成良好で硬質である。特に凹面には全面に煤状炭化物が付着している。



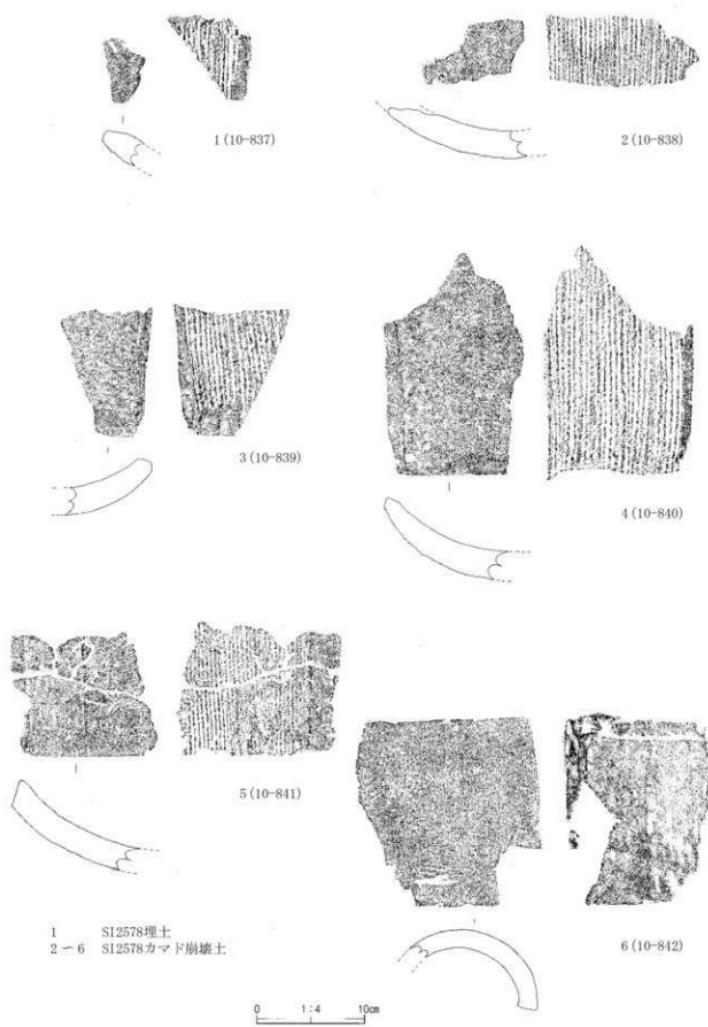
SI2578 壁穴跡全体図



第27図 SI2578 壁穴跡



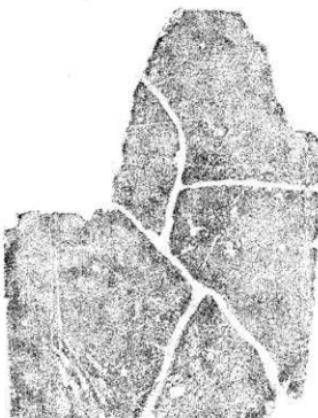
第28図 SI2578 堆穴建物跡出土遺物



第29図 SI2578 堅穴建物跡出土瓦



1 (10-843)



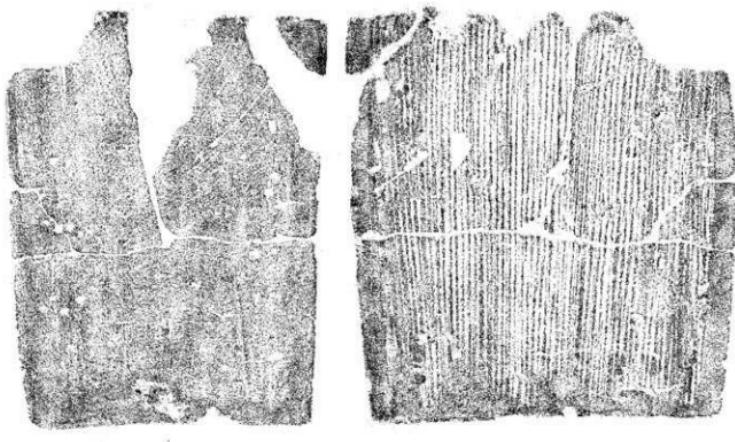
2 (10-844)



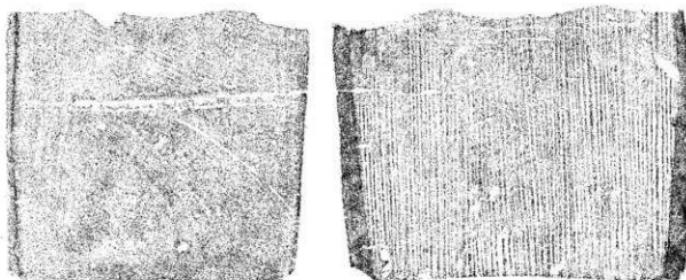
1・2 SI2578カマド崩壊土

0 1:4 10cm

第30図 SI2578 壁穴建物跡出土瓦



1 (10-845)



2 (10-846)

1・2 SI2578 カマド崩壊土

0 1:4 10cm

第31図 SI2578 堅穴建物跡出土瓦

S I 2579 竪穴建物跡 (第32図、図版8)

調査区南東の第VII層面で検出された。上部の大半は搅乱・削平を受けており、遺残状態は悪い。南北2.4m以上、東西90cm以上、壁高48cm以上、西壁が北で11° 東側に振れる。

S I 2579 竪穴建物跡出土遺物 (第33図1、図版14)

瓦 (第33図1) : 埋土より出土した一枚づくりの平瓦であり、凸面には縄目の叩き痕と砂粒、凹面には布目压痕が見られる。

3 基本層序および各層出土遺物**基本層序 (第22図)**

第115次調査地は、旧地形は北から南へ緩やかに傾斜する地形であったと考えられる。現在は近世以降の耕作に伴う造成や、近現代の削平により、現在は北から南へ段状に低くなっている。

以上の土地利用状況を踏まえて、第115次調査地の基本層序をまとめると以下のようになる。

第I層 表土:現表土。黒褐色土(10YR3/2)。

調査地全体を覆う。

第II層 造成土:近現代の造成土。以下のように細分される。

第II-1層 造成土1:灰黃褐色砂質土 (10YR4/2)。 調査地南側のみ堆積。非常にしまりが強い。

第II-2層 造成土2: にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/4)。調査地南側のみ堆積。非常にしまりが強い。

第II-3層 造成土3: 暗褐色砂質土 (10YR3/4)。φ5mm~12mmの黄褐色粘土粒 (10YR5/6) 混入。

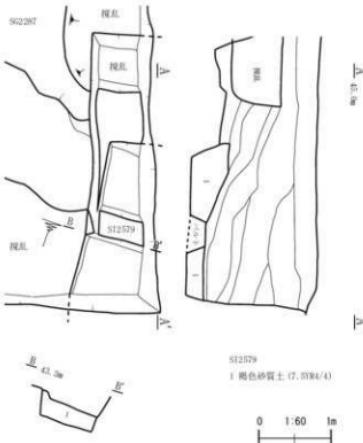
第II-4層 造成土4: 暗褐色砂質土 (10YR3/4)。

第III層 近世耕作土: 暗褐色砂質土 (10YR3/3)。多数の歯、搅乱が検出されている。

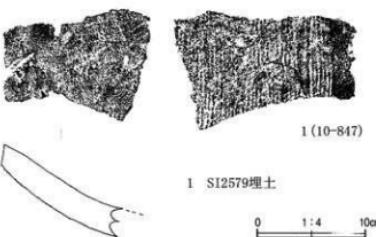
第IV層 中世整地: にぶい褐色砂質土 (10YR4/3)。SK2576が検出された。

第V層 古代整地層: 古代最上層の遺物包含層。以下のように細分される。

第V-1層 古代整地層: 褐色砂質土 (10YR4/4)。SA2577が検出された。



第32図 SI 2579 竪穴建物跡



第33図 SI 2579 竪穴建物跡出土瓦

第V-2層 古代整地層：にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）。

第VI層 古代整地層：明褐色砂質土（7.5YR5/6）。SI2578・2579の上部を削平している。

第VII層 古代整地層：褐色砂質土（7.5YR4/6）。SI2578・SI2579の検出面。

第VIII層 地山飛砂層：明黄褐色砂（10YR7/6）。調査地北側にのみ検出される。

第IX層 地山粘土層：黄褐色粘土（10YR5/6）。調査地全体の地山になっていると考えられる。

第I層 出土遺物（第34図1～4、図版14・15）

1は第1層から、2～4は攪乱からの出土である。

石製品（第34図1）：1は凝灰岩製の砥石である。4面を使用している。

陶器（第34図2）：2は株洲系中世陶器の壺体部破片である。外面に平行叩き痕、内面に無文の當て具痕が見られる。

弥生土器（第34図3）：3は弥生土器の底部破片である。体部上半～口縁付近に細い2条の横走沈線と列点文が施され、横位LR単斜綱文が施文されている。底部に木葉痕がある。

石製品（第34図4）：4は頁岩製の剥片である。

第II層 出土遺物（第34図5～7、図版15）

須恵器（第34図5）：1は蓋の破片であり、つまみは欠損している。天井部外面へラ切り後、外面にケズリ調整を施す。内面を硯に転用している。

土製品（第34図6）：6は博の破片である。灰褐色を呈し、焼成良好で硬質である。一面にのみ摩減、使用痕跡がある。

銭貨（第34図7）：7は大正に発行された一銭硬貨である。

第III層 出土遺物（第34図8・9、第36図1、図版15・16）

須恵器（第34図8）：鉢の底部破片である。外面体部および底部に手持ちケズリ調整と内面にハケ目調整を施す。

銭貨（第34図9）：寛永通寶（古寛永、初鑄1636年）である。

瓦（第36図1）：一枚作りの平瓦である。凸面には綱目の叩き痕と、一部に布目压痕がある。凹面には布目压痕があり、糸切り痕が見られる。暗青灰色から褐灰色を呈し、硬質である。

第IV層 出土遺物（第34図10～12、第35図1・2、図版15）

須恵器（第34図10～12）：10は壺口縁部破片であり、内外面に煤状炭化物が付着しており、被熱している。11は壺であり、ヘラ切り後ナデ調整を施す。口縁部外面に被熱した痕跡がある。12は蓋欠片であり、つまみは欠損している。天井部へラ切り後、外面に軽いナデ調整を施す。内面を硯に転用している。35図1は短頸壺の口縁部から肩部破片である。肩部は火ぶくれし歪な形となっている。2は大甕の口縁部から頸部破片である。外面に平行叩き痕、内面に同心円状の當て具痕がある。

土師器（第35図3）：壺の底部破片であり、粗雑なつくりで糸切り無調整である。内面にミガキ調整および黒色処理を施す。

陶器（第35図4）：瀬戸・美濃系陶器の灰釉焼口縁部破片である。

第V層 出土遺物 (第35図5～13、図版16)

すべて第V-1層出土の遺物である。

須恵器 (第35図5・6) : 5は台付壺の底部破片。底部ヘラ切りで台取り付け後、ナデ調整を施す。6は短頸壺の肩部破片である。二条の横走沈線がある。

赤褐色土器 (第35図7～11) : 7～9はいずれも壺の糸切り無調整の底部破片である。8、9には被熱した痕跡がある。10は台付壺の底部である。11は長胴甕の体部破片である。外面に手持ちケズリ調整、内面下半にハケ目調整を施す。外面に煤状炭化物が付着している。

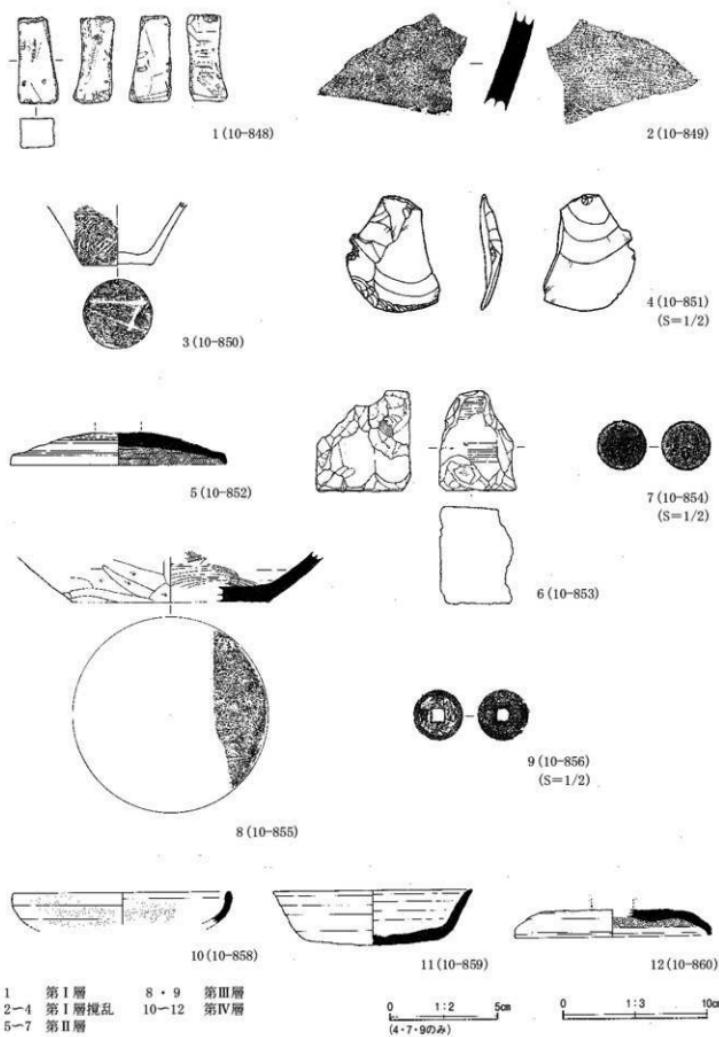
緑釉陶器 (第35図12) : 緑釉陶器の碗体部破片である。内外面に緑釉を施釉している。胎土は灰色を呈し、焼成は硬質である。洛西産。

土製品 (第35図13) : 塚の破片である。いぶし焼成により黒色から灰白色を呈し、軟質である。

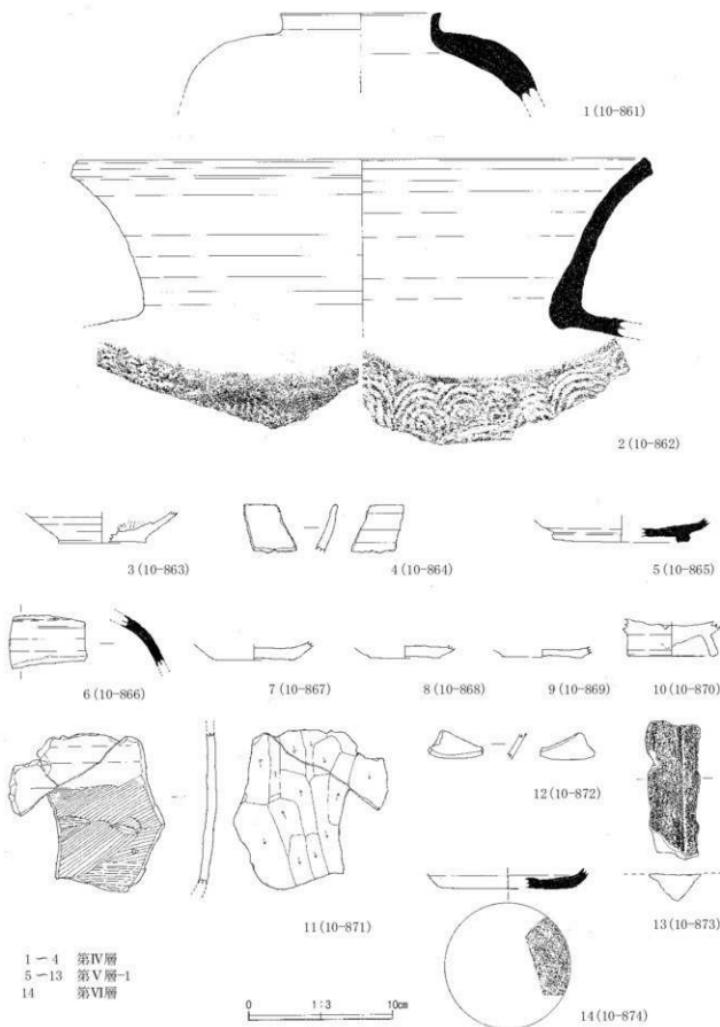
第VI層 出土遺物 (第35図14、第36図2・3、第37図1・2、図版16)

須恵器 (第35図14) : 壺底部破片である。ヘラ切り後、手持ちケズリ調整を施す。

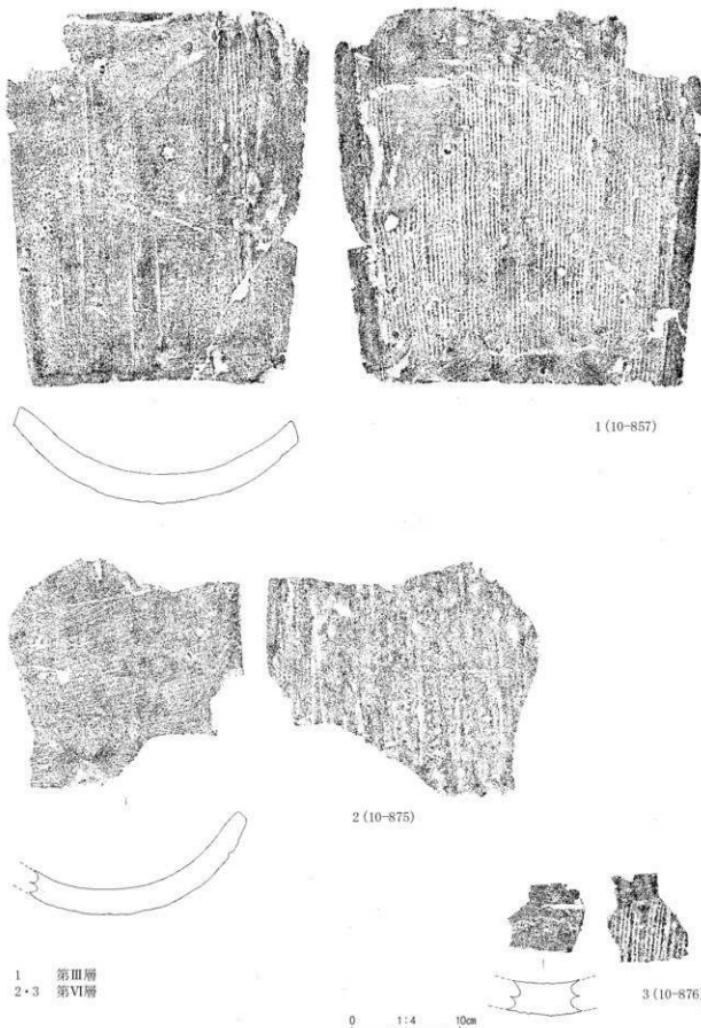
瓦 (第36図2・3、第37図1・2) : 2は一枚づくりの平瓦であり、凸面には網目の叩き痕、凹面には布目圧痕あり、糸切り痕が見られる。灰白色を呈し、やや軟質である。離れのための砂粒多い。3は一枚づくりの平瓦である。凸面には網目の叩き痕、凹面には布目圧痕があり、指頭痕がある。焼成硬質で青灰色を呈す。第37図1は丸瓦である。凸面はナデ調整を施し、凹面は布目圧痕あり。焼成軟質であり、橙色を呈す。やや摩耗している。第37図2は丸瓦である。凸面はナデ調整を施し、凹面は布目圧痕がある。焼成は軟質であり、橙色を呈す。やや摩耗している。凹面に被熱痕あり。



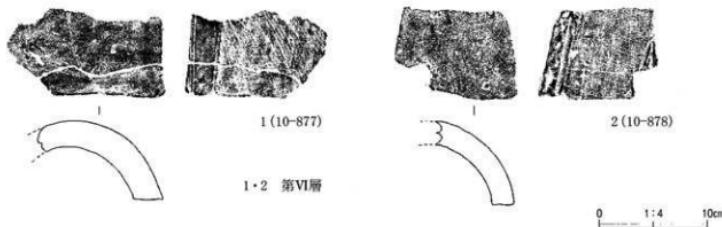
第34図 第115次調査地第I層—第IV層出土遺物



第35図 第115次調査地第IV層-第VI層出土遺物



第36図 第115次調査地第III層・第VI層出土瓦



第37図 第115次調査地第VI層出土瓦

表6 第115次調査地検出遺構一覧

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備考
SG2289	第21図	III	近世	SA2577→	南北13m以上、東西12m以上。不正円形。 長軸1.7m、短軸30cm以上。深さ48cm。楕円形。
SK2576	第21図	IV	中世		幅1.7m～1.9m、長さ10m以上。深さ50cm。南北方向。北で10° 東へ振れる。
SA2577A・B	第24図	V-1	古代	SA2577A→SA2577B	南北3.2m、東西3m以上。壁高40cm以上。北壁が西で13° 北側へ振れる。上部は整地により削平を受けている。カマドが東側に設置されている。
SI2578	第27図	VII	古代		南北2.4m、東西90cm以上。壁高48cm。西壁が北で11° 東へ振れる。上部は整地により削平を受けている。
SI2579	第32図	VII	古代		

例1 SA0000→ 当該遺構がSA0000より新しい

例2 →SA0000 当該遺構がSA0000より古い

表7 第115次調査地出土遺物属性表(1)

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	備考
10-824	第23図1	図版12-1	S62289埋土		陶器	瓶	8.2			近世陶器。口縁破片。素焼き。
10-825	第23図2	図版12-2	S62289埋土		陶器	瓶				近世陶器。体部破片。外面部輪の地に施墨跡をかけた。
10-826	第23図3	図版12-3	S62289埋土		鉢	窓口通販				古窓水、初鎌1636年。外縁外径24.0mm、内縁内径15.5mm、外縁厚1.2mm、重量3.06g。
10-827	第25図1	図版12-4	S425778抜き取 り		須恵器	壺	8.0			底部破片。底部周縁へラ切り後ナデ調整。
10-828	第25図2	図版12-5	S425778抜き取 り		赤褐色土器	壺				底部破片。底部周縁へラ切り後ナデ調整。
10-829	第26図1	図版12-6	S425778抜き取 り		平瓦					凸面には施墨の叩き痕。凹面には布目压痕。系切り痕あり。硬質。灰色から青灰色。焼成良好。砂粒少し。
10-830	第26図2	図版12-7	S425778抜き取 り		平瓦					凸面には施墨の叩き痕。凹面には布目压痕。系切り痕あり。軟質。灰色。いぶし焼成。
10-831	第28図1	図版12-8	S12578床面		須恵器	壺	13.7	9.8	4.6	底部周縁へラ切り後、寧々なナデ調整。外面部輪状焼成物が付着。
10-832	第28図2	図版12-9	S12578床面		須恵器	壺	14.3	8.2	3.8	底部周縁へラ切り後、外縁外側および中央ケズで剥離。底部破片。
10-833	第28図3	図版12-10	S12578 カマド崩壊土		土師器	壺			4.0	底部破片。赤ロマ成形。丸底。内面にミガキ調整。底部手持ちをアズリ調整。被熱している。外面部輪状焼成物が付着。
10-834	第28図4	図版12-11	S12578隕床		土師器	甕				体部破片。外面に縱方向のハケ目調整。
10-835	第28図5	図版12-12	S12578 カマド崩壊土		土師器	長胴甕			7.8	底部から体部破片。底部ナデ調整により圧痕が明。外縁に縱方向のハケ目あり。内面に横方向のハケ目調整。
10-836	第28図6	図版12-13	S12578カマド 崩壊土		赤褐色土器	長胴甕				凸面から底部の破片。外縁口縁部から底部ナデ調整。タクタク剥離痕あり。内面横方向のハケ目調整。
10-837	第29図1	図版12-14	S12578埋土		平瓦					凸面には施墨の叩き痕。凹面には布目压痕。端部面取り。軟質。灰色。被熱痕あり。系切り痕あり。一枚づくり。
10-838	第29図2	図版12-15	S12578カマド 崩壊土		平瓦					凸面には施墨の叩き痕。凹面には布目压痕。硬質。軟質灰色。被熱痕あり。系切り痕あり。一枚づくり。摩耗している。
10-839	第29図3	図版12-16	S12578カマド 崩壊土		平瓦					凸面には施墨の叩き痕。凹面には布目压痕。硬質。青灰色。被熱痕あり。系切り痕あり。一枚づくり。摩耗している。
10-840	第29図4	図版13-1	S12578カマド 崩壊土		平瓦					凸面には施墨の叩き痕。凹面には布目压痕。硬質。青灰色。系切り痕あり。摩耗している。端部面取り。被熱痕あり。一枚づくり。
10-841	第29図5	図版13-2	S12578 カマド崩壊土		平瓦					凸面には施墨の叩き痕。凹面には布目压痕。硬質。软質により橙色へ灰色。系切り痕あり。一枚づくり。
10-842	第29図6	図版13-3	S12578 カマド崩壊土		丸瓦					にぶい黄褐色。凸面はナデ調整。凹面は赤褐色。被熱痕あり。
10-843	第30図1	図版13-4	S12578 カマド崩壊土		平瓦					凸面には施墨の叩き痕。凹面には布目压痕。硬質。被熱により橙色へ灰色。系切り痕あり。一枚づくり。
10-844	第30図2	図版13-5	S12578 カマド崩壊土		平瓦					凸面には施墨の叩き痕。凹面には布目压痕。软質。摩耗している。灰白色。系切り痕あり。一枚づくり。一部分離して三次の被熱があり。
10-845	第31図1	図版14-1	S12578 カマド崩壊土		平瓦					凸面には施墨の叩き痕。凹面には布目压痕。全周ナデを施す。やや軟質。摩耗している。保状焼成物が付着している。
10-846	第31図2	図版14-2	S12578 カマド崩壊土		平瓦					凸面には施墨の叩き痕。凹面には布目压痕。被熱により橙色。硬質。煤が付着している。

III 第115次調査報告

表8 第115次調査地出土遺物属性表(2)

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	備 考
10-847	第33図1	図版14-3	S12579堆土		平其					凸面には溝目の切痕。前面には布日压痕。端部にナデ施す。灰褐色。無切り底。一枚作。
10-848	第34図1	図版14-4	I層	PJ~PK 83~84	石製品	純石				4面使用している。基岩岩製。
10-849	第34図2	図版14-5	I層搅乱	PJ~ PJ84	陶器	甌				体部破片。珠微糸中世陶器。体部破片。外縁平行引き底。内面無文の当て長い底。
10-850	第34図3	図版15-1	I層搅乱	PJ~ PJ84	弥生土器	鉢		4.8		裏面に大擦痕。体部と上口縁付近に細い2条の横走状線と列点文があり。L字単節斜彫文。
10-851	第34図4	図版15-2	I層搅乱	PJ~ PJ84	石製品	剥片				頁岩。
10-852	第34図5	図版15-3	II層	PJ~PK 80~82	須恵器	盞	15.0			天井部に外面ケズり底。ヘラ切り後、外縁ケズり調整。つまみ部欠損。内面輪用線。針状突起入。
10-853	第34図6	図版15-4	II層	PJ~PK 83~84	土製品	壺				灰褐色。硬質。燒成良好。一面にのみ摩滅。使用痕跡あり。
10-854	第34図7	図版15-5	II層	PJ~PK 83~84	鐵貨	寛永通寶				古寛永、初鋤1636年。外縁外径23.0mm。外縁内径1.2mm。重量1.0g。
10-855	第34図8	図版15-6	II層	PJ82	須恵器	鉢				底部破片。外縁体部および底部手作りケズり。内縁ハケ目切り離し不明。
10-856	第34図9	図版15-7	II層	PJ~PK 83~84	鉢	寛永通寶				古寛永、初鋤1636年。外縁外径24.0mm。内縁外径5.5mm。外縁厚1.2mm。重量3.0g。
10-857	第36図1	図版16-5	III層	PJ80	平瓦					凸面には溝目の切痕と一部布日压痕。前面には布日压痕。硬質。暗灰褐色から褐色。粗頭板あり。圓筒系切り底。一枚作り。
10-858	第34図10	図版16-8	IV層	PJ80	須恵器	环				口縁部破片。外縁に環状炭化物付着。被熱痕あり。切り離し不明。
10-859	第34図11	図版16-9	IV層	PJ 80~81	須恵器	环	13.8	9.1	3.8	ヘラ切りナデ調整。被熱痕あり。
10-860	第34図12	図版16-10	IV層	PJ 80~81	須恵器	盞	13.6			天井部ヘラ切り後、外縁に軽いV字凹痕。天井部内面輪用線。つまみ部欠損。針状突起入。
10-861	第35図1	図版15-11	IV層	PJ 80~81	須恵器	短頸壺	11.0			口縁部から体部破片。体部に施くられあり。
10-862	第35図2	図版15-12	IV層	PJ 80	須恵器	大甌	39.2			口縁部から頸部破片。内面に同心円状の凹底。具底。
10-863	第35図3	図版15-13	IV層	PJ~PK 83~84	土師器	壺		6.0		底部破片。回転糸切り無調整。内面をミガキ調整。黒色処理。系切引粘連。
10-864	第35図4	図版15-14	IV層	PJ~PK 83~84	陶器	瓶				戸口、美濃系陶器。灰釉剥離縁部破片。
10-865	第35図5	図版15-15	V層-1	PJ~PK 83~84	須恵器	台付坏		9.2		底部破片。回転ヘラ切り。台取り付け後ナデ調整。
10-866	第35図6	図版15-16	V層-1	PJ~PK 83~84	須恵器	盞				肩部破片。二条の横走沈凹あり。
10-867	第35図7	図版15-17	V層-1	PJ82	赤褐色土器	坏		5.7		底部破片。底部回転糸切り無調整。
10-868	第35図8	図版15-18	V層-1	PJ~PK 83~84	赤褐色土器	坏		4.8		底部破片。底部回転糸切り無調整。
10-869	第35図9	図版15-19	V層-1	PJ~PK 83~84	赤褐色土器	坏		5.8		底部破片。底部回転糸切り無調整。
10-870	第35図10	図版15-20	V層-1	PJ~PK 83~84	赤褐色土器	台付坏		5.7		底部破片。
10-871	第35図11	図版16-1	V層-1	PJ~PK 80~82	赤褐色土器	長胴甌				体部破片。外縁手持ちケズり、内面下部ハケ目調整。
10-872	第35図12	図版16-2	V層-1	PJ~PK 83~84	綠釉陶器	瓶				体部破片。内外面に緑釉施釉。赤褐色。
10-873	第35図13	図版16-3	V層-1	PJ~PK 80~82	土製品	壺				摩耗している。
10-874	第35図14	図版16-4	VI層	PJ~PK 80~82	須恵器	坏		8.7		底部破片。ヘラ切り後、手持ちケズり調整。
10-875	第36図2	図版16-6	VI層	PJ 80~82	平瓦					凸面には溝目の切痕。前面には布日压痕。灰褐色。系切り底。一枚づくり。
10-876	第36図3	図版16-7	VI層	PJ 80~82	平瓦					凸面には溝目の切痕。前面には布日压痕。硬質。粗頭板あり。灰褐色。一枚づくり。
10-877	第37図1	図版16-8	VI層	PJ 80~82	丸瓦					凸面はナデ調整。前面には布日压痕。灰質。褐色。やや摩耗している。
10-878	第37図2	図版16-9	VI層	PJ 80~82	丸瓦					凸面はナデ調整。前面には布日压痕。灰質。褐色。やや摩耗している。前面被熱痕あり。

IV 考 察

1 第114次調査について

第114次調査地は、焼山地区北西端部にあたり外郭西門から尾根状地形を西側へ約120m下った地点で、城外西大路の推定延長線上に位置する。周辺調査では尾根上方の東側に外郭西門跡や外部区画施設、城外西大路・城内西大路の遺構が確認されている。また、中世の墓域や、皆に関係する土塁と門跡なども確認されている。調査は、城外西大路の位置と実態の把握、並びに周辺の利用状況を確認することを目的に実施した。

調査の結果、今次調査地の旧地形は、東から西へ下る傾斜面であり、中世や近世から現代にかけての削平や盛土などにより、現状が段上の地形となっていることが確認された。主な遺構として、溝跡3条、土坑13基、集石遺構1基、道路遺構1面が確認された。各遺構は第III～VII層面で検出されており、出土遺物などから第III～IV層は中世から近世、第V層以下は古代に造成された整地層であると考えられる。

これらの遺構については、出土遺物や検出層位、重複関係などから、年代や新旧関係の把握が可能である。以下、遺物包含層や検出遺構の年代について検討を行った上で、全体の利用状況と変遷についてまとめる。

(1) 各遺物包含層の年代について

層序に従い、各層出土の年代比定資料をみていくと、第I層からは現代のガラス片などが出土している。調査区周辺は近年まで宅地として利用されていた場所であり、それらに関わる近現代の造成土であると考えられる。

第II層からは、年代を比定する遺物は出土していないが、後述するIII層面検出の遺構の埋土上層から寛永通宝（古寛永・初鋤1636）が出土しており、近世以降の造成土であると考えられる（第7図3）。

第III層については、第III-1層・第III-2層からは年代を比定する遺物は出土していない。第III-3層からは、16世紀末に位置づけられる肥前I期の肥前系陶器壺（第16図16・17）が出土している（註1、以下、遺物年代比定における「～に位置づけられる」の表記は、「～の」と表記する）。出土遺物の年代をふまえると、16世紀末以降に造成された整地層であると考えられる。

第IV層からは、年代を比定する遺物は出土していないが、後述する同層面検出の土坑墓の年代から14世紀以降の整地層であると考えられる。

第VI層からは、9世紀第1四半期の糸切り後丁寧なナデ調整を施す土師器壺が出土している（註2、第17図5）。また、経年変化により磨耗したI群の瓦も混入している（註3）。出土遺物の年代をふまえると、9世紀第1四半期以降に行われた整地層であると考えられる。

第VII層はSX2575の道路整地であり、第VII-1層と第VII-2層の二時期がある。第VI層と第VII層の年代をふまえると8世紀から9世紀第1四半期にかけての整地層と考えられる。

第VIII層からは、8世紀代の土師器壺が出土している（第17図6）。出土遺物の年代とSX2575下層などとともに他にほとんど遺物が出土しない状況などをふまえると創建期に遡る可能性を持つ8世紀前半の整地層であると考えられる。

(2) 各遺構の年代について

第III-3層面検出遺構では、前述したようにSD2558から寛永通宝が出土しており、近世以降の遺構と考えられる(第7図3)。またSD2559、SD2560からは年代比定資料が出土していないが、切り合い関係からSD2558より古い16世紀末以降の遺構であると考えられる。

SX2570については一字一石経と考えられる遺物が出土しており(第12図2~4)、SD2558より新しく、17世紀以降の近世の仏教関連遺構であると考えられる。

SK2561~SK2569については、いずれも量に差はあるが火葬骨片が出土していること、また埋納錢と考えられる模鉄錢が出土していることから、いずれも火葬墓であると考えられる。錢種が限定される模鉄錢が出土していること(註4)、検出層位の年代をふまると16世紀末の中世末から17世紀初めの近世初頭の遺構であると考えられる。

第IV層面検出遺構SK2571については、遺物は出土していないが、火葬骨片が出土していることから、火葬墓と考えられる。SK2572~SK2574については、模鉄錢などの遺物の出土状況から、いずれも土坑墓であると考えられる。また、錢種が限定されない模鉄錢が出土していること(註5)、前述した第III層面検出遺構の下層より検出され時期差が存在すること、後城遺跡などの周辺の利用状況などをふまえると、14世紀後半以降から16世紀後半にかけての中世後期の遺構と考えられる。

(3) 第114次調査地全体の利用状況の変遷について

以上の年代の検討を踏まえ、全体の利用状況と変遷についてまとめると、表9のようになる。前述した年代をもとに、利用状況の変遷と特徴について検討していく。

①中世以降の利用状況の変遷

今次調査で検出された遺構で、最も新しいと考えられるのがSX2570である。SX2570からは一字一石経であると考えられる遺物が出土しており、前述した通り切り合い関係から、近世の仏教関連遺構であると考えられる。また秋田県内において確認されている一字一石経が出土している類例の多くが、17世紀から18世紀の遺構であることから、SX2570も同時期の遺構と考えられる(註6)。

表9 第114次調査地遺構変遷表

層序	VII層 VIII層	VII-1層 VIII-2層	VI層	V層	IV層	III-3層	III-1層 III-2層	II層	I層
時期区分	8世紀前半	8世紀	9世紀前半	11世紀	14世紀~16世紀後半	16世紀末~17世紀初	17世紀~	近世以降	近現代
検出遺構		VII-2~VIII-1			SX2571	SK2561			
					SX2572	SK2562			
					SX2573	SK2563			
					SX2574	SK2564→SD2559	SX2570		
						SD2560→SD2558			
					SK2565				
					SK2566				
					SK2567				
					SK2568				
					SK2569				

次に、土坑墓類については、上層の遺構は火葬骨片が多量に含まれており、模鋳鏡の鏡種が限定されているのに対し、下層で検出された遺構については、火葬骨片の出土量が少なく、木棺が確認されることや、模鋳鏡の鏡種について幅があるなど、時期差の他に差異が認められる。つまり、中世から近世初頭にかけて墓域として利用されたが、14世紀後半以降から16世紀後半、それ以降とに分かれ2時期の利用段階があることが考えられる。文献資料によると今次調査地付近に14世紀後半から17世紀初めにかけて、大悲寺が存在していたことが記されており、土坑墓類も寺院に関係する遺構であると考えられる（註7）。

その他に出土遺物として、中世前期に遡ると考えられる12世紀後半の珠洲系陶器片口鉢(第12図1)や13世紀の瓷器系陶器壺(第16図12)が出土していることから、遺構等は検出されなかったが、中世前期の早い段階に、この地域の利用が遡る可能性や、今次調査地を含めた周辺が宗教的な場所としての利用が遡る可能性が考えられる。

②城外西大路の変遷について

古代における利用について、SX2575 道路構造が検出されている。これは外郭西門から延びる城外西大路の延長部分と考えられる。今回の調査や過年度調査に成果により、城外西大路が外郭西門から東へ延びる傾斜が緩やかな尾根筋を下り、後城遺跡へ向かっていくことが確認された（第38図）。

道路遺構は整地層と硬化面からなり、第VII-1層面と第VII-2層面の2時期が確認されている。道路幅は下層面道路が7m、上層面の道路は下層の路面に南側の補修拡張部を合わせると7.2mであり、はじめに第VII-2層が造成された後、補修等の目的をもって第VII-1層が南側にのみ造成されたと考えられる。道路遺構の年代については、前述した第VII-1層と第VII-2層の年代をふまえて、下層道路が8世紀前半の創建期、上層道路が8世紀後半の外郭Ⅱ期以降と考えられる。さらに過年度調査において、尾根上方で確認されていた城外西大路の年代線が、外郭Ⅰ期およびⅡ期のものと、外郭Ⅲ期のものであることをふまえると上層道路については外郭Ⅲ期に対応する可能性が考えられる（表10、註8・9）。



③第114次調査の成果と課題について

第114次調査では、中世から近世については、火葬墓や一字一石経塚の仏教関係遺構を確認し、墓域として利用されている状況を把握することができた。古代については、奈良時代から平安時代にかけての城外西大路に關係する道路遺構を確認し、外郭西門から尾根を下り西側の後城遺跡方向へ向かう城外道路の位置関係を確認した。

今後はこれまでの調査成果と合わせ、焼山地区における城外西大路の変遷と方向性について構造を含めた総合的な検討が必要であり、また中世の利用状況についても総合的な利用状況と変遷の把握が必要である。

表10 秋田城遺構変遷表

	733	750 760	800	830	850	878	900 915	950
政庁	I期	II期	III期	IVA期	IVB期	V期	VI期	
政庁区画施設	築地塀 材木列塀	築地塀 材木列塀	一本柱列塀	一本柱列塀	一本柱列塀	材木列塀	一本柱列塀	
外郭	I期	II期	III期 (小堀あり)	IV期 (小堀あり)	V期			
外郭区画施設	瓦葺き築地塀	非瓦葺き築地塀	柱列塀	柱列塀	材木列塀	大排		
大烟地区	I期	II期	III期 生産施設	IV期 生産施設整備 居住区域住戸数増加	V期	官衙建物		
焼山地区	I期 A類建物 A類建物倉庫	II期 B類建物 B類建物倉庫か?	III期 (小堀あり) C類建物 C類建物倉庫群	D類建物?				
鶴ノ木地区	I期	II期	III期	IV期	V期			
外郭西門	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期		
時期	天平5年(733)~	8C後半前葉~	8C末・9C初 ~	9C第2四半期~ 9C第3四半期~	元慶2年(878) ~	10C第2四半期 ~10C中葉		
備考	秋田出羽櫛削創建期	天平宝字年間 '秋田城'改修期	第三期全体 大改修期	天長7年 (878)地盤 復興期	元慶の乱 (878)後 復興期	最終末期		

2 第115次調査について

第115次調査地は焼山地区北西部にあたり、周辺の調査では、西側隣接地で外郭西門へ延びる築地塀および材木塀が検出されている。さらに第19・52次調査ではこの外郭西辺区画施設と別れ、北東に延びる布掘り状溝の存在が確認されて

表11 第115次調査地遺構変遷表

層序	VII層	VI層	V層	IV層	III層	II層	I層
時期区分	8世紀後半	9世紀 第1四半期	10世紀 中葉	中世	近世	近世 以降	現代
検出遺構	SI2578		SA2577A・B	SA2576	SG2289		
	SI2579						

調査の結果、調査地北側では、

第104次調査でも検出されていた近世の大きな土取り穴（SG2289）により、古代の包含層や遺構面が大きく削平されている状況が確認された。また、調査地の南側においても中世の整地や、近世以降の造成や耕作の痕跡が確認されており、古代の遺構面は大きく削平を受けていることを確認した。旧地形は、北から南へ低くなる傾斜面であったが、近世以降の耕作に伴う造成や、近現代の削平により、現況は北から南へ段状に低くなっている。

主な遺構として材木塀1条、堅穴建物跡2軒、土坑1基が検出された。各遺構は第IV～VII層面で検出されており、第IV層は中世以降、第V層以下は古代に造成された整地層であると考えられる。

これらの遺構については、出土遺物や検出層位、重複関係などから、年代や新旧関係の把握が可能である。以下、遺物包含層や検出遺構の年代について検討を行った上で、全体の利用状況と変遷について以下にまとめることとする。

（1）各遺物包含層の年代について

層序に従い、各層出土の年代比定資料をみていくと、第I層からは現代の廃材やガラス片などが出土している。調査区周辺は近年まで宅地として利用されていた場所であり、それらに関わる近現代の造成土であると考えられる。

第II層からは、大正時代のものと考えられる一銭硬貨が出土しており、当該期以降の造成土であると考えられる（第34図7）。

第III層からは寛永通宝（古寛永、初鋲1636年）が出土している（第34図9）。また烟の歯が検出されていることから、畑地造成土および近世以降の耕作土であると考えられる。

第IV層からは15世紀後半の古瀬戸（美濃系陶器の灰釉焼）が出土していることから（第35図4）、15世紀後半以降の中世整地層と考えられる。

第V層からは10世紀中葉に位置づけられる足高の赤褐色土器の台付壺が出土しており（第35図10）、10世紀中葉以降の整地層であると考えられる。

第VI層からはII期の瓦および橙色系のIV群瓦が出土しており、8世紀末以降の整地層と考えられる。

第VII層からは、年代比定資料は出土していないが、後述する削平を受けた検出遺構の年代が8世紀後半であることや、最下層の整地層であり、遺物をほとんど含まないことなどから、周辺利用開始に伴う創建期の整地層であると考えられる。

（2）各遺構の年代について

第V層面検出遺構では、SA2577A・Bから



は、9世紀後半以降の赤褐色土器坏破片が出土しており、前述した検出層位の年代や過年度調査の結果等から、10世紀中葉以降に位置づけられる。

第VII層面検出遺構では、SI2578 カマド崩壊土から8世紀後半の丸底で外面に手持ちケズリ調整、内面に粗雑なミガキ調整を施す土器坏が出土している（第28図3）。床面からは、8世紀第3四半期のヘラ切り後底部外周および中位にケズリ調整を施した須恵器坏が出土している（第28図2）。またカマド構築材として使用されたと考えられる瓦は、8世紀後半の2群の瓦が出土している（第29図3・4）。これらの出土遺物の年代から、SI2578は8世紀後半の遺構と考えられ後段階の造成や削平により、第VII層が検出面となったと考えられる。SI2579からは年代比定できる遺物は出土していないが、検出層位やSI2578と同じ方位によって作られていることから、SI2578と同時期の遺構と考えられる。

これら各層検出遺構の年代は、前述の各整地層の年代とはほぼ一致しており、前後関係も含め矛盾しない。

（3）第115次調査地全体の利用状況の変遷について

以上の年代の検討を踏まえ、全体の利用状況と変遷についてまとめるに、表11のようになる。先述した年代をもとに、利用状況の変遷と特徴について検討していく。

①利用状況の変遷について

今次調査で最も古い遺構はSI2578とSI2579である。これらの堅穴建物跡は8世紀後半の遺構と考えられ、建物の方位や年代観により、一定の規則性を持って計画的に配置されたと考えられる。建物の年代は8世紀後半の外郭二期にあたり、当該時期において、外郭西門周辺の利用が活発になり、居住域として利用されたと考えられる。その後10世紀中葉段階で整地が行われ、SA2577A・Bの区画施設が構築される。

中世以降については、今次調査において遺構は確認されていないが、第IV層のような中世整地や14世紀以降の遺物が検出されている。また、周辺調査においても14世紀代と考えられる遺物が確認されている。文献資料においては、16世紀後半に寺内で「寺内の砦」をめぐり合戦が行われた記載があるが（註11）、今回検出された中世整地や遺物は、この地区的利用がそれ以前に遡ることを示唆している。

②外郭西門周辺の外郭区画施設について

10世紀中葉以降に造成された区画施設について、詳細を検討していく。今次調査において確認されたSA2577A・Bについては、104次調査で確認されたSA2278・SA2279と、19次調査で確認されたSD294に連なる一連の遺構であると考えられ、SA2577AがSA2279と、SA2577BがSA2278と接続する。SA2577Aが構築された後、SA2577Bが構築されている。最終的には丸太材を抜き取られ、機能を停止している。埋土に差異が少ないとから、短期間に内に立て替えが行われていると考えられる。

検出された層位が10世紀中葉の整地層であることから、それ以降の遺構であると考えられ、秋田城跡外郭区画施設の終末期にあたると考えられる。過年度調査の結果から、城内大路を横断する形で構築されていることや、外郭西門と接続しない方向に延びることから、外郭区画施設とは別に城内側を区画していると考えられる。今回の調査や104次調査の結果から、秋田城跡の終末期において外郭西門の東側が南北方向により簡略化した区画施設としての材木塀によって区画されていた段階があることが把握された。

③第115次調査の成果と課題について

第115次調査では、過年度調査地にて検出されていた区画施設と一連となる材木塀跡を確認し、終末期に外郭西門の城内側に併行する区画施設の年代と位置等を把握することができた。他に周辺が、8世

紀中頃から後半にかけて堅穴建物跡が営まれて、居住域として利用されている状況を確認することができた。

註1 これ以降の考察における肥前系陶磁器の年代比定は下記に基づき記述する。

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年・九州近世陶磁学会 10周年記念』

註2 これ以降の考察における古代出土土器の年代比定は、以下の秋田城跡出土土器編年成果に基づき記述する。

小松正夫 1992 「秋田城とその周辺地域の土器様相（試案）－第54次調査の木簡・漆紙文書件出土器を中心にして－」『第18回古代城柵官道跡検討会資料』pp. 139-144

伊藤武士 1997 「出羽における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』7 pp. 32-44

小松正夫・日野久・西谷隆・伊藤武士 1997 「秋田城跡出土土器と周辺窯の須恵器編年（試案）」『日本考古学協会 1997年度秋田大会報告・律令国家・日本海一シンポジウムII・資料集一』pp. 18-30

秋田市 2001 「第7章 秋田城跡の発掘調査 九、秋田城跡出土土器編年」『秋田市史 第7巻 古代 史料編』pp. 383-390

秋田市教育委員会 2007 「秋田城跡の土器編年」『秋田城跡II-鶴ノ木地区-』pp. 340-345

神田和彦 2010 「ケツリのある赤い坏—古代秋田都城の赤褐色土器坏B-」『北方世界の考古学』すいれん舎 pp. 187-210

註3 秋田市教育委員会 2009 「秋田城跡・秋田城跡調査事務所年報 2008」

出土瓦については表12に基づき分類した。

表12 秋田城出土瓦の分類

分類	細分	色調	地成	質	備考	時期区分	年代
1群	1-1群	灰白	良好・やや不良	軟質	・丸瓦は無段タイプのみ	政庁Ⅰ期 (外郭Ⅰ期)	8世紀 第2四半期
	1-2群	灰色					
	1-3群	黒色（いぶし焼成）					
2群	青灰・灰・暗灰	良好・堅密	硬質	・砂粒が多い ・平瓦では特に凸面に砂粒が目立つ ・補修瓦か	政庁Ⅱ期 (外郭Ⅱ期)	8世紀後半	
	3-1群	暗灰～灰					
3群	3-2群	灰・灰黄・黄灰	良好・堅密	硬質	・丸瓦は有段タイプ ・平瓦は板状工具で撫で調整 ・成形時に粘土板を重ねた痕跡 ・古墳廻塚跡産か	政庁Ⅲ期以降 (外郭Ⅲ期以降)	8世紀末・ 9世紀初以降
	4-1群	褐色系を主体					
	4-2群	黄灰・ にぶい黄灰～褐灰色					

※秋田市教育委員会2009「IV 考察 ⑤外郭西門跡および周辺出土の瓦について」をもとに作成

註4 本邦の模範銭については、その生産と流通が16世紀中頃から後半にかけて著しく増加し、特定の銭種に限られるとされる。

兵庫埋蔵銭調査会 1996 『日本出土銭総覽』

註5 本邦模範銭は14世紀から鋳造が開始され、無作為に銭種が選別され、ばらつきがある傾向が認められる。

兵庫埋蔵銭調査会 1996 『日本出土銭総覽』

註6 秋田県教育委員会 手取櫛跡調査事務所 DB『秋田県櫛跡集成』

註7 大悲寺は、『秋田六郡寺院調書』（県立図書館蔵）によると 1282年鎌倉の將軍、惟康親王が蒙古襲来戰勝祈願のために建てた土崎港三ヶ寺の一つとされる。

内田武志 1969 『菅原江澄隨想集』『水の面影』

註8 秋田市教育委員会・秋田地所 1981年 『後城跡発掘調査報告書』

註9 秋田市教育委員会 2016 『秋田城跡・秋田城防調査事務所年報 2015』

註10 秋田市教育委員会 2018 『秋田城跡・秋田城防調査事務所年報 2017』

註11 今村義孝校注 1966 『奥羽永慶軍記』上・下

V 秋田城跡環境整備事業

令和2年度の整備

今年度も昨年同様、これまで整備を進めてきた外郭東門地区や政庁地区、水洗廻舎を復元した鶴ノ木地区を面的に結ぶため、平成22年度から実施している城内東大路の復元を行った。また、明治時代の道路(現市道)開削により分断されている西側史跡公園と歴史資料館を結び、一体化を図るとともに遺跡表示を行う史跡公園連絡橋整備工事に着手した。工事は令和2年度から同3年度にかけての継続工事として実施される。

環境整備工事の概要は以下のとおりである。

1 城内東大路整備 実施地区 大畠地区
整備面積 247.4 m²

工種	細目	数量	金額(千円)	備考
敷地造成工	盛土工	1式	118	山砂盛土
	法面工	1式	49	機械築立整形、人工芝張芝
施設整備工	遺跡表示工	1式	2,671	大路表示(W=13.5m, L≈11.15m) 乗入舗道舗装工(W=2.0m, L≈8.1m)
排水工	排水工	1式	37	浸透樹 2基
縁石工	縁石工	1式	43	地先境界ブロック(L=14.0m)
雑工	雑工	1式	408	支障木撤去等
直接工事費計			3,326	



城内東大路完成(西から)

2 史跡公園連絡橋整備 実施地区 大畠地区・焼山地区
整備面積 94 m²(令和2年度下部工分)

秋田城跡史跡公園連絡橋整備工事区分

工事名	工事内容	工 期 (予定)
下部工	橋台2基基礎工事・軸体工工事、デッキ基礎工事、土留めバネル設置	令和2年6月29日～令和3年5月31日
上部工	橋梁工事、東側デッキ製作設置、西側盛土補強 広場・園路造成、	令和2年12月23日～令和3年10月29日
遺構表示工	政庁・城内西大路遺構表示工事、高欄・防護柵設置、舗装・融雪設備工事、照明設備工事	令和3年2月19日～令和4年3月11日

令和2年度工事内容

工事名	細 目	数 量	金額(千円)	備 考
下部工	橋梁下部工	1式	106,756	橋台2基(A1・A2)軸体工、 A1橋台基礎鋼管杭打設6本、 A2橋台基礎鋼管杭打設4本
上部工	鋼橋上部工	1式	7,208	鋼橋製作関係経費
遺構表示工	遺跡表示工	1式	2,018	舗装資材等製作
工事費計			115,982	



下部工工事実施状況(南西から)

VI 秋田城跡保存活用整備事業

史跡秋田城跡を、市民の郷土学習の場として有効活用を図るために、令和2年度は下記の事業を実施し、全体で3,079名の参加者があった。

1 第114次発掘調査現地説明会（7月23日）

令和2年度に寺内焼山地区で行われた第114次発掘調査の成果を公開した。参加者84名。

2 史跡秋田城跡パネル展（8月15日～8月30日・秋田市ポートタワーセリオン、9月12日～9月27日・秋田市民俗芸能伝承館旧金子家住宅、11月27日～12月11日・秋田市役所1階市民ホール）

市内の観光施設等の展示会場3箇所で、一般市民を対象に、秋田城についてわかりやすく解説したパネル展を開催した。また、パネル展のテーマに合わせた「秋麻呂くん通信」を発行し、会場で配布した。令和2年度のテーマは「つながる海のみちー秋田城と日本海交流ー」で行った。見学者は、ポートタワーセリオン192名、民俗芸能伝承館450名、秋田市役所1階市民ホール471名。

3 発掘体験教室（8月29日）

小中学校を対象に発掘調査を実際に体験することを通じ、地域の歴史や秋田城跡への理解と関心を深めてもらうことを目的として体験教室を開催した。参加者14名。

4 史跡探訪会（9月19日）

市街地内にありながら、良好に保存された自然環境の観察を通じ、史跡指定による環境保全の側面も理解してもらうことを目的とし、史跡内を散策、動植物観察を行った。参加者16名。

5 史跡散策会（9月26日）

一般市民を対象に、ボランティアガイドの説明による史跡内の散策会を開催した。参加者24名。

6 東門ふれあいデー（10月4日）

秋田城跡外郭東門周辺を会場として、史跡の保護と活用を推進するために、地域住民と共同で各種イベントを開催する予定だったが、新型コロナウイルス感染症の拡大をふまえ中止とした。

7 史跡めぐり（10月24日）

史跡公園以外の史跡指定地域の魅力を伝えることを目的として開催した。参加者19名。

8 学習講座（前期：中止、後期2月4日・5日）

秋田城跡全般について発掘調査成果、文献史料、環境整備事業等を学んでもらう講座を開催した。秋田城跡の周知を図るとともに、ボランティアガイド養成講座も兼ねる。前期については新型コロナウイルス感染拡大により開催を見送った。参加者は後期15名。

9 出前講座（随時）

秋田城跡について出土遺物や遺構の画像等を用いて解説する講座を実施した。生徒に秋田城跡への関心や理解を深めてもらう機会とするため、郷土学習の授業の一環として歴史資料館職員が講師となり授業を担当した。参加生徒数合計535名。

10 企画展（前期7月23日～8月23日、後期12月19日～1月31日、出張展示9月19～1月17日）

秋田城跡や周辺遺跡から出土した資料から、古代の秋田について興味や関心を深めてもらうことを目的として開催した。テーマはそれぞれ、前期「秋田城をめぐる交流ー続く道・つながる海ー」、後期「秋田城と古代貨幣」を行った。また前期企画展と同様の内容について由利本荘市本荘郷土資料館において出張展示を行った。見学者は前期751名、後期291名、出張展示217名。